ハリー・マジック 1 ~ 吸血鬼の友 ~

枯葉花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハリー・マジック 1 ～吸血鬼の友～

【Nコード】

N9794R

【作者名】

枯葉花

【あらすじ】

ハリー・ポリエステルが、吸血鬼と戦う・・・
みたいな、対戦ものになったら、嬉しいです・・・。

プロローグ(前書き)

よろしくお願ひします!!
ちよこつと、ながいですが。

プロローグ

じねは……………

ハリー・ポリエステルたちが、

生き抜いた、打倒の、人生

を、

のである。

小説化したも

ハリー・ポリエステルたちの、生き様が、少しでも、伝わるように、

ハリー・ポリエステルが、『英雄』という、名にふさわしく、

心より、願っております。

英雄、ハリー・ポリエステルらが、住んでい

映ったら、よいのですが……。

る、

の家トホーム
(より)。

『銀河警察』
神ゴッ
()

敬を以て

ハリー・ポリエステルたちへの、

プロローグ（後書き）

空白だらけの物語を、よくぞ読んでくださいました！！
次からは、こんなことありませんので・・・。
読んでください。

それは 当たらないと思って、送った懸賞ハガキが、当たった時の感覚に、似てた
ブローグみたいなのはしてないので題名がうざくても、見てく
ださると嬉しいです。

それは 当たらないと思って、送った懸賞八ガキが、当たった時の感覚に、似てた

<1>プロローグ

『人間』の皆さん。

『魔法使い』を……。それ以前に『魔法』を信じていますか？

あなたの反応が『信じています！』であつても（というか、そうであつてほしい……。）『うわっやっぱファンタジーは、だめだわ』であつても（というか、言わないでほしい……。）私たちはいます。

そして、もう一つ質問を……。『ヴァンパイア吸血鬼』や『にんぎょ人魚』など『地球』では『架空』と言われているものを信じていますか？

今回は『魔法使い』と同じように信じている人は危ないと思いますよ？

だつて私たちが住んでいるところは別名『ぎんがけいさつ銀河警察』（ほんとは『ゴットホーム神の家』）その名に恥じず私たちは『地球』で『架空』と呼ばれているものが、起こす被害から生物を守っている。

そして発明途上国である地球には内密にしているけれど。

そんな『地球』で秘密にされていることを話すけど……。他言しないでネ？

<2>ハリーポリエステルたちとは誰だ……。？の謎を説く！！

（1）

「エ……。エルちゃん……。。」

「なあに？ベラ？」

おつと言い忘れてたけど友達には『ポリエステル』の『。』がついているところを取つて『エル』つて呼ばれてる。（と言っても友達は3人だけだね。）一般的には『ダブルフェイス二重目』とか『ヤンク殺人鬼』とか『ジ壊れた子』など……。言われている。え？

ひどいのが多いだって!?

うん。多いヨ。

まず、なんで『ダブルフェイス二重目』なのかってこと。

根本的に……『銀河警察』に住んでいる人達は、茶色い目をしている。が、私は真っ赤な目をしているのだ。もちろんそれだけでも異常なのだが、怒ると目の色が赤から青へ変わるのだ。そして性格も変わる。

どう変わるかは……見たときのお楽しみだ。

次にどうして『殺人鬼』って呼ばれているかってこと。まあ。これは手早く説明できるネ。なんとたつて『ブルーアイ青目』の時いろいる人を殺しかけたからだと思う……ヨ。

や。まだだれも殺してないからネ?そしてなんで『ジャンク壊れた子』なのかってこと。それは多分私の瞳の色が、赤だったり青だったりするからだと思う。

それに『銀河警察』の人達は茶色い髪をしてるんだけど、私は真っ黒なんだよね。この星で黒は『ヴァンパイアが好む悪しき色』って呼ばれてるからよけいに『ブルー変』ってイメージが強くなるんだよね。

だから『ジャンク』ってわけ。もう一つたすと私の扱ってる魔法は『生活科』と言って多分地球では『家庭科』とか呼ばれていうと思う……。あり?『技術』だったかな?

あ!もう一つ!私は一流貴族でこれから出てくる3人も一流貴族だよ。

で、場面を戻すと。

「行かないの?」

「どこによ。ベラ」

「え……ほら……あのう……講堂に……」

できつきから話してるのが、通称『ベラ』。

お名前は、『ミュージック・イザベラ』絶世の金髪美女。(あ……
・死語だ。(ぎんぎらしてる美しさじゃなくてはっと目に行くよう

な、心地のいい美しさだ。美しすぎて家族代々美しさを封印している。(なぜ家族代々美しいかは・・・また。)封印を解いたらみんながひれふしたくなるぐらい美しい。(てかまじでひれふしちゃう)音楽の魔法を扱っててめっちゃくつちゃ才能のある人だ。そして『音楽家』の最高位だ。(万年最下位の私と違って。)そして私と『対なる壊れた子』あの子はもともとが青目ブルーアイでメガネをはずすと赤目になる。もちろん性格も変わる。

どう変わるかは・・・見たときのお楽しみだ。

おっと話がそれすぎたな。もどすと・・・。

「いやーよ。」

「なんで・・・?」

「どーせ呼ばれないもん!!」

「・・・えと・・・いや・・・呼ばれるかもよ・・・。」

「自信ないならゆるーなよお」

これだから・・・ベラは・・・うそでも呼ばれるって断言してくれたらしいのにさっ!!

ガチャッ

この時ドアが開いたことに気づいた人はいなかった・・・

<3>ハリーポリエステルたちとは、誰だ・・・?の謎を解く!
1~2~

ちなみに今、私とベラは私の部屋にいる。

部屋まではるばる迎えに来てくれたベラに向かって、駄々をこねてるんだが・・・。

その時ドアが開いたのにベラが気づいた。

「レーサーなぜここにい?」

私はいや々な顔をしてレーサーの方に向き直った。

「何・・・乙女の部屋に入ってきてんだよ・・・痴漢が・・・

「はあ？誰が『痴漢』だつてえ？てめえに痴漢する奴なんて、一生
かかったつてあらわれねーよ。」

説明したくないが分からないと、後々困るので説明すると……。こいつの名前は『スポーツ・ウレイザー』だ。あだ名は（通称）『ウレイザー』を簡単にして『レーザー』だ。ぴつたりだろう？突っ走るコイツらしくてさあ。ライオンみたいに逆立ったブロンドの髪と、キレイな緑色の目が特徴的だ。

まあ……。あとは……。チビだつてとこかな。そしてこいつは、3歳から1軍の頭トクであり12歳になった今では5軍も率いる頭様である。あ……。頭つてのは裏番とか不良のリーダー的存在のこと。3歳から頭になるつてことは、すげえことなんだと。まあ一般的には『緑目の不良。』だとか呼ばれてるな。

「あつあの……。エ、エルが……。講堂に……。行きたくないんだつて……。レ、レーザー。」

「はあ？なんでーな？」

「やっぱり出来る奴には、分かんねーよなあ！！」

「呼ばれねーのに行くなんて、バカみたいなことしないよ。」

「ばかやろう。呼ばれるかもしれないだろう。」

「れ、レーザー。あのおう。もうすぐ時間だよ……。」

ベラにまっすぐ見られたレーザーは、真っ赤になった。そんなの気づいてないベラはジツとレーザーを見つめている。いまのレーザーの顔見ものだよ……。あんな真っ赤な顔さんの……。ベラだけだよ……。

「はいはい。照れるなつて……！」

「て、照れてない……。照れてないぞ……。」

「真っ赤だぞおー！！」

「声がでかいぞ。聞こえたらどうすんだ？ベラに気付かれたらおしまいだ。」

あーあ。私のことはなあんも思つてないつて分かる。

私に手かけて言うなんて……ベラにやるつもりしたら考え付いたとたんに気絶するだろうに……。

「さっ行きましょおう。」

「嫌味な奴……。」

「エツエルちゃん……早い……!!」

さあ!!

歩いてる時間を、使って、講堂の、説明を、したいと、思います。講堂は、なんか、教会みたいな感じの、椅子が、ずらっあっと、並んでる、体育館みたいな、トコ。

ステージの上には、巨大な、スクリーンが、あつて、私が、めえっちやくつちやいきたくない、イベントが、毎年一度元日の次の日（1月2日）に、あるのだが、このイベントにだれるのは、生まれ時から、4年に、一度、4歳8歳12歳……って感じた。

「おい!!なにぼーっとしてんだよ!!」

ん……もう着いちゃったかぁ……説明は、こんな感じで、いかな？

え？

結局、『イベント』ってなんなのかって？

んなの、見てからの、お楽しみってどこかな？

「あいあい。じゃっ入りまひよか……。」

「あっあのおう……エツエルちゃん……ハツハカセが……」

。

「え!!」

<4>ハリーポリエステルたちとは、誰だ……？の謎を、解く!!〜3〜

「おい……ハカセ……俺が呼びに行くから、場所とつとけつて言っただ口……。」

「ははは。待ちきれなかったんだ……。おっそいんだもんレーサー君。」

「何気に、侮辱してんじゃねえよ。」

「ははは。ごめんね。やっと、来る気になった？エル。」

「ハカセ……ううん。来たくなかったよ。でも、ベラに言われ
ちやあねえ。」

この人は、通称『ハカセ』ご本名は、『ヘッド・MK・スタディー・
スクール』ちゆう、ご立派な、お名前なんだけど……ながすぎて、
めったに、呼ばれない。

すっごいきれーな、^{ブロンドヘア}金髪で、すっごいきれーな、^{ブロンドアイ}金目なんですが・
いや……ブロンドアイなんて、ないか……『神の目』って
言われてる。

『神の目』のことは、あと後、分かるだろおう。

で、なぜ、ハカセって呼ばれているかってことなんだけど、彼は、
『知識科』で、知識を、脳に、直接、入れ込み、戦闘の時、引き出
すという、魔法を、使っているので、眼鏡を、引き出す時に、はめ
ていて……その姿が、『ハカセだ！』みたいな感じになって、
名前は、本人も、あんまり、好んでいないので、『ハカセ』になっ
ちやったって、ことだ。

あり？

長文に、なつちたなあ……。

でことで、戻すと……。

「さあ、入ろう。えと……僕たちは、こっちだけど、エル、頑
張ってきてね。」

「はん！やることなんて、ないだろーけどなっ！！」

「ちやおつとおくレーサーふざけんなよう！！」

「エッエル……がんばってね……」

「ん……どーせ、頑張ることないけどね」

あーあ。

説明しますよ……『イベント』……。

これは、銀河警察に、入る人、読み上げの、儀式なんだ……。

まず、銀河警察に、入るには、人生試験が、10級以上じゃないと、

いけない。

人生試験とは、元日に、0歳から、ずうっと、永遠に、受つづけなければ、いけない試験で、おつきい方が、すごい試験だ、これと一緒に、元日に受けなくてはいけない試験があつて、それは、個別試験と言つて、自分の専門教科を、受けるもので、私は、『生活科』を受け。

これは、何級でも、銀河警察に、入れる。

ついでに書くと、私は、1級で、小さくなるほど、すごい。

なんだけど・・・人生試験は、3級なんだ・・・。

けど、ベラ、ハカセ、レーサーは、すごい飛び級しまくつて、8歳で、銀河警察に、入ってしまった、普通は、12歳で、入るもので、（私も、ベラも、ハカセも、レーサーも、12歳だ。）だからわたしは、『おちこぼれ』みたいなかんじだ・・・。

けど、3人は、私に、遠慮して、一度も、仕事を、受理してない。

それが、一番つらい。

つらいんだ・・・。

だから、私は、このイベントが、嫌いだ。

呼ばれなかった時の、みんなの反応を、思い浮かべると、悲しい。

ついた。

私は、8歳のことを、まじまじと、思い出していた。

あの失望忘れない・・・。

忘れられない・・・。

<5>オマケ<8歳の頃>

イベントは、人生試験が、10級以上じゃないといけない。
だから、8歳のころの、イベントは、誰もが、どうでもいいと、思
っている。

はず。

だった。

だから、その日、私は、普通に、4人で、おしゃべりしていた、ほ
かの3人も、普通だったし、おかしい行動なんて、全然みせなかつ
た。

だけど、呼ばれたんだ。

「ミュージック・イザベラ、スポーツ・ウレイザー、ヘッド・
MK・スタディー・スクール、前へ。」

「え……みんな？」

「おう!!！」

「うっうん……。」

「そうなんだ。僕たち、今日から、銀河警察に、入るんだよ。」
彼らは、飛び級していたのだ……。

楽々と、飛び級していたのだ!!

私が、2級になれて、舞い踊ってた時に、みんなは、10級を、超
えていたのだ……!!

超えて……!!

忘れられない……思いで。

わたしは、ここ。

動けない。

彼らは前へ。

進む……。

進む。

<6>進んだよ……私も……!!

「エーでは、今から、入隊する奴を、発表する!!呼ばれた奴は、立つように。」

呼ばれないと、立つこともできないのか。

ほんと、やないイベントだ。

「ちなみに、今年は、総合隊長からの、推薦枠があるから、楽しみに、するように。」

総合隊長とは、なんと、ベラの、お父さんだ。

ていうか、ミュージック家は、ずーと、代々、総合体長を、しているんだ。

けど、おかしいな。

ベラのお父さんは、ベラを、推薦するなんて言う、ヒキ的なことは、しなかったのに……優秀な子なんだろうな。

「じゃー推薦枠から説明すると、ええと……『ハリー・ポリエステル』立つように。」

へえーハリーポリエステルか………つてええ!!

「私い!!」

「はい、はい、元気いいねーさっすが、推薦枠。」

「隊長!!マジですか!!」

「俺は、冗談いわねーよ。」

「エルちゃん!!」

「エル!!」

「エル。」

「みんなあ〜なれちゃったよ!!私〜!!」

「ポリエステル。私語厳禁。あと、イザベラあとで隊長室にこい。」

ベラのおとおさあん……うええ〜ん……。いいひとだよおうっ。

私を、進めてくれたよおうっ!!

進めて……。

それは 当たらないと思って、送った懸賞八ガキが、当たった時の感覚に、似てた
えっと・・・長かったですかね？
あの・・・暑苦しかったですかね？（最後の）
すいません！！けど、次も見てください！！

隊長の声は、よく響く(前書き)

3話目ですね。

また、長くなってしまいましたけど……。
すみません。

次こそは……と、思ったださい。

隊長の声は、よく響く

<1>プロローグ

響くつてのは、よく聞こえるつてことで、聞きたくなくても聞こえるつてことで、いや、別に、聞きたくないつてわけでもないつちやあないんだけど、やっぱり、聞こえちゃうつてことで、いや、実際に聞いた方が、いいつてことは、分かっているんだけど、そんな話されると、じみーに、傷つくつてことで、や、つてかあ傷つくつてゆーか、いやーな気分になるつてこととで、傷つくほどでもないとゆーか、けど結論ずけたら
ま、やっぱり、隊長の声は、よく響くつてことになる。

<2>おにいちゃんは、科学者。

ベラのお父さんは、多忙だ。

なんつったつて、総合体長なのだから、数多くある、被害届の中から、これは、この隊長それは、この隊長つて決めなきゃいけないだから……もー大変だ。

だから、今日もないのは、あたりまえで……べつに、私は、がっかりなんて、してなくて、だから……悲しんでない。

「ごめん。やっぱり、いなかっただね……エルちゃん。」

「いーよ、代わりに、おかあさんとか、おにいちゃんとか、いない？」

「あ……おにいちゃんが、いると、思う。」

あーベラには、おにいちゃんが、いるんだ。

ふつう、銀河警察の、メンバーは、結婚したら、やめるんだけど、総合体長は、世代で、続くものだから、15〜18のあいだで、結婚しなきゃいけないんだと、ベラのおにいちゃんは、16歳で、ベラと、結婚するかもしれない!!らしい……。

「じゃ、おにいちゃんに、お礼、言わせて、もらおっかなあ。」

ちらつと、見ると、レーザーは、いやそうな、顔を、している。婚約者つてユー噂の、おにいちゃんに、会いたくないんだろう。おにいちゃんは、ベラと、同じ、金髪と、ただの、青い目を、している。

「うん……。おにいちゃん!!」

『の、あいだに、おにいちゃんが、いるはずの、部屋に、向き直った。』

「ああ……ベラ……友達かい？」

出てきたのは、優しくそくに、メガネをかけた、うつつくしい青年だった。

「うつつん……エルちゃん……と、レーザーと、ハ……ああ!! スツスタディーくん」

「エツ!! 君が、親父が、認めた子、エルちゃん!？」

と、私のことを、見て、言った。で、レーザーと、ハカセのことは、かんスルーだ。

「で、何のようだい？ベラ……僕が、この部屋に入ってるときは、集中させてくれて言ってただろ？」

「ごめん……おにいちゃん。」

そこで、ベラは、私の方を、ちらつと見て、つつかえながら、恐る恐る言った。

「あの……お……とう……さ……ん……のお……こと……
……なんだけどお……ひっ……」

けど、そこまで言ったときに、『ひっ』と、言ってベラは、して、黙ってしまった……？何でだろ？

「なんもないよ……おにいちゃん。」

「え？ベラ？」

えく何も無いことないだろおう？

どーして……？ベラ……？

すると、ハカセが、すつと、いまにも飛び掛りそうな、私の、前に、出て、こういった。

「僕が・・・おにいさんが、作ってる、装置を、見せてほしいって、言ったんです。ごめんなさい。まさか、部屋に入ってるときは、集中したいって、ベラに言ってたなんて、知らなかったんです・・・」

え・・・ハカセ・・・？
すると、レーザーが、

「もうすんだら！？ハ・・・スタディー！！もう、いこーぜ。」
はあ・・・！？レーザーまで・・・？

すると、ベラのおにいちゃんは、分かったよ。みたいなことをぶつぶつ言いながら、ベラの方から、さつきまで、がんスルーだった、2人を、見て、

「いや・・・いいんだよ。見るだけじゃなくて、試作品を、あげよう。」

と、にこつりしながら、言った。

そして、おにいさんが、持ってきたのは、『時間止め30分バージョン』と書いてある下に、おもいつきり、『試作品につき、X-^{エックス}P17のみ、使用許可中』と、書いてある、物だった。

そして、私が、そこを、ガン見してたら、おにいさんが、微笑んで、こう言った。

「エックスP17ってのは、僕のことだよ。」
いや・・・それは・・・どーでもいいってか・・・なんてか・・・
「ピンチになったら、使いな。」

それだけ言って、4つ、ベラに、押しつけると、部屋に、入っていた。

そして、ベラは、ダットと、家から、出て行った・・・
つてええ！？

そんな・・・ここベラんちなんだけど・・・。

「僕らも・・・出よつか。」

ハカセが、こつち2人に、にっこり笑いかける。

「おう！..!」

「え……う……ん……」
「なんで……？ベラ……意味わかんない……？」

<3>赤目

「ねっ……み……んなぁ……いつまでも、走ってないで、教えてよぉ。」

そして、すっごい前で、走ってた。3人が、ふり向いた。

そして、レーサーが、ずかずかと、こっちにやってきて、一言。

「ぶあくかあっ！！バーカ！！バーカ！！この鈍感女っ！！足もおせーし、いいところねえなぁ。」

「そんなとこないよっ！！足は、遅いけど……鈍感だけど……バカじゃないっ！！」

「ふんっ。一個減ったからってなんだ？分かれや！！普通に！！」
くっ……そー言われるとぉう……」

「教えてよ……。ベラ……」

すると、ベラは、驚くような速さで、こっちへ、帰ってきた。

そして、おもむろに、メガネを取ると、叫んだ。

「面白くないっ！！なんで説明しないと分かんないわけっ！！クスツ。分かんないならぁ……説明してあげよつかぁ……あんたの、馬鹿っぷりを……フッフ……」
来たー！！

これぞ、ベラの、『赤目』バージョン！！

性格悪いんだよね……。

とにかく、『喜』を、いや、どちらかというと、『笑』を、求めて、怖いぐらい、人を、バカにする、『青目』の時からでは、想像できない、人格だ。

「ざつと説明してやると……兄貴は、親父が嫌いでえ私が、親父のことを、話したから怒った……ん？……よく考えたらぁ……兄貴が、やったあれ気づかなかったぁ？」

そして、私の方を、じろつと見てから、ふつと笑って、しゃべった。

「まあっ気づいてたら、言わないもんね……。『教えてえ〜』なんて……。兄貴。ちよつとだけど、魔力を、上げたしたんだけどお。」

全然気づかなかった……。じゃあ……。この二人は、分かったのか……。レーザーも、ハカセも、ベラもわかったのに……。私は……。分かんなかった……。

「分かったあ〜？だから、出てきたの……。みんな、同じことを思っで。くすくすっ！！あんた以外ね。」

「う……。ベラ……。ひどい……。そんなこと、言わなくても、いいじゃん！！」

「イーじゃん。ホントの事なんだからあ……。ねっ。レーザー」

レーザーが、真っ赤になつてゐるのなんか、私は、どーでもよかつた。私は、『落ちこぼれ』で、彼女は、『^{ペラ}優等生』で……。分かつてるつもりだった。

赤目の時は、意地悪だつてことも、分かつてた。

分かつてた。

はず……。はずだった。

私は、きつと、ベラをにらみつけると、自分の家へ、走つて行つた。

振り返らず。

<5>レーザーと一緒に？

「おい……。エル……。きいてんのか……。」

「きいてるよ……。今日が、レイウッド隊長の、説明会なんだろ……。」

「それもあるけど……ベラのこと……許してやれよ。」

「怒ってない。」

「怒ってる!」

「怒ってないよ……レーザー……私の代わりに、隊長の、説明会、聞いてきてくれ。」

「やだ!!俺は!!ベラに、頼まれたんだよ!!連れてきてくつれつて。」

「そーか……じゃあ……いこつかなあ……。」

「そーだよ!!引きこもってないで、説明会、行こつぜ!!」

私は、さつきから、必死に、こつちを、見つめてる、レーザーを見た。

ここは、私の、部屋。

レーザーは、わざわざ、私の部屋まで、呼びに来たんだ。

「いいよ。行こつ。楽しみだなあ〜レイウッド隊長の、おすすめの、事件。」

「なんだよあ〜。俺が来なくても、行つてただら!？」

「気づいたか。」

私は、ニヤツと、レーザーに、笑ってみせる。

そして、ゆつくり考えた。

わたしは、レーザーが、こなくても、行つてたか？

私は、フツと笑つて、部屋を、出た。

「おい!!地味においていくなよ!!」

「気づいたか。」

「気づくつツの!!」

多分。いや、絶対、行かなかつたな。レーザーが、来なかつたら

サーと一緒にだもん
だつて、私の、行動の、90%は、レー

「おい……ベラと、あって、ソッコ無視したり、すんなよ……」

「バカゆーな。さすがにしねーよ。」

今、私は、レーザーと一緒に、事件の、説明会が、ある講堂に、むかつてる。

ベラに会うのは、気が引けるけど、赤目じゃない、ベラは、かわいい、かわいい私の、ベラだ。

大丈夫。

きつと。

「怒ったりすんなよ……。」

「しーない!!」

「出てきたりすんなよ……。」

「しーない!!」

「泣いたりすんなよ……。」

「しーない!!」

「傷つけんなよ……。」

「てめえ、黙れ。」

「なんでだよ!!」

イライラする……!!

ベラのことばかり考えてる。

「もー着いたし。」

「ううう。」

ギイイイイイ!!

んー?こんな音したっけな?

「あ!!!ベラ!!」

普通に。

普通につとお……。

「あ。エル。久しぶり。2週間ぶり?それぐらいかな?」
と、行ったベラの目は、紫に、光っていた。

「……ベラ……コンタクトにしたの?」

「うん!!かわいいでしょん。」

「う・・・ん」

ベラは、裸眼で、赤。

眼鏡ありで、青。

そして・・・コンタクトで、紫。

性格は、裸眼で、『喜』を、求める、性悪。

眼鏡で、控えめな女の子。

コンタクトで・・・『普通』の、女の子・・・?なのだ。

はあ・・・けど、私は、やっぱり、青が好きだよ・・・。

「さく始まつちゃうよ。説明会。」

「うん・・・。」

すると、ハカセが、そっと近寄ってきた。

そして、ニコニコしながら、教えてくれた。

「あれでも、ベラは、仲直りしたくて、コンタクトにしたんだ。コ

ンタクト大っ嫌いなのに。紫だったら、スラスラ、話せるから・・・

いいかな・・・?って、言ってたよ。」

「そっかあ。」

私は、コンタクトを、しきりに、気にしてる、ベラを、見て、にっ

こり、笑いましたとさ。

<7>説明会

「エーじゃー説明会を、始めます。」

「まずく今回の、捕まえるやつわあく吸血鬼です。」

「ええ!!!」

みんなが、そこらで、騒ぎ始める。

なんでダ?

だいたい、吸血鬼ってなんだ?

えーと・・・血を吸う鬼?

そんなのいるんだあ。

そして、ハカセに、詳しいことを、聞こうと、思って、ハカセの方

を、見ると・・・

ハカセの顔は、これでもかかってくらい、体調悪そうで、ムリに、ニコニコして、平静を、襲おっていた。

「ハカセ・・・？」

私が呟くのと、同時に、ベラが、席を、立って、ハカセに、なんか言うと、去って行った・・・。

て・・・ベラ！？

「ハカセ・・・ベラ・・・なんて？あと・・・大丈夫？」

「ベラは、『気持ち悪くなってきたから、帰る。』だって、あと・・・僕は、大丈夫だけど、ここ熱いでしょ？だから、涼しいところに、行くよ。」

そういって、ハカセも、どっか言った。

私は、レーザーを、チラツと見た。

「レーザー・・・二人とも・・・どーしたんだろおうねえ。」

「黙って聞けよ。ほら。」

そういつてるレーザーも、隊長が、悪そうだ。

「だーまーれ。吸血鬼は、確かに、あの星じゃあ、最強だがナ。騒ぐな。」

え・・・！！最強！！

「レーザー」

「黙れって！！」

ムムム・・・でも・・・最強って・・・？

血を吸うだけなのに・・・か？

「エー。で、その吸血鬼だが、王族なんだよねー。めんどくさいこととに。」

王族！！

これは、無知の、私でも、知っている・・・。

その種族の、まとめ役であり、絶対権力者である・・・王族！！めんどくさいじゃあ済まないぞお・・・こりゃ。

地球の、警察だって、国王を、捕まえるのに、抵抗あるでしょう？

それと、一緒に、いくら、銀河警察でも、捕まえずらいつてもんだ。
「うんでー名前は、エドワードっていうんだが、王族でも、一番めんどくさい『次期国王』とか、『王子』とか、呼ばれてるやつでー。」

「うわ・・・王さんが、一番大事にしてる『息子』ってわけかあ・・・
。 やっちまったなあ。」

「エーで、かかっている容疑は、『規定外の、食飲。』と、『規定外の、奴隷制度。』と、『規定外星での、食飲。』の、3件だ。」
「なんだそりゃ？」

「そして・・・『次期国王』何で、王さんに、『捕まえても、いいですか？』聞かなきゃあなんなんだあわあ。」
「え！？」

「だから、吸血鬼の、城に、行って、『捕まえてもいい？』言つて、『いいよ。』って言われたら、エドワードを、捕まえるってわけだ。」

「ウソ・・・私、初めての、事件で、いきなり、国王と、出会うわけ・・・しかも、最強の、最強に！？」
「ウソだろー？」

「じゃー3月の、第一木曜日に、城まで行くんでー、準備しとけよ。」

「質問ある奴ー？」

「はい！！ほんとーに、会うんですか？」

「ウイ（地球の、フランス語で、『はい』）」

「どーやって会うんですか？」

「気合で。」

「ムリだろー。」

「ありえねーレイウッド隊長。」

「マジありえねえ・・・だいたい、『最強』の、吸血鬼って、なんなんだよ！！」

< 8 > オマケ〜レイウッド隊長の昔話、始まり。始まりい。〜
俺の名前は、レイウッド隊長。
で、この話は、俺が、スポーツ・レイウッドから、レイウッド隊長と、なる話だ。

俺の名前は、レイウッド。

あだ名は、レイチエル。

ブロンドヘアーに、グリーンアイ。

長いまつ毛に、パッチリおめめ？

最近の、悩みは、『女顔』な、ところだ。

冗談じゃねえ。

俺は、男にもてる気は、サラサラ、ないっつーのに！！

親父からは『そんな女々しい顔は、やくざには、似合わないだろ・

・』なんて、言われて、勘当されたし。

ふ・ざ・け・ん・な！！

俺だって、好きで、『女々しい』わけじゃねえよ！！

オマケに、今日は、兄貴である、『かのゴットアイ』の、結婚式だ。

もちろん、勘当された、俺は、出ていない。

あ・・・ゴットアイっつーのは、レーサーの、お父さんだ。

だから、俺は、レーサーの、叔父だ。

で、戻ると。

俺は、酒場で、酒を、飲みまくってた。

かれこれ、2時間。

何回も、ナンパされたがな。

はあっ・・・なんで、かあさん似に、生まれただろ・・・。

「ヨコいいか？」

またナンパ男かよ。

「勝手に座れば。」

俺は、ぶっきらぼうに、答える。

俺だって、もう、3回も、ナンパ男と、喧嘩したから、喧嘩したくねえんだよ。

「フフ・・・勇ましいな。」

「野郎つてのは、そーゆーもんだろ。」

もう。付きまとわないでくれ。

「ほう。てつきり。お嬢さんかと。」

「何が言いたいんだ。てめえわよ・・・。」

あゝ!!!

ウツゼー!!!

こーゆーきつたねえ酒場に、なんでこんな『高貴』な感じな奴が、来てるわけ!?

酔いつぶれたやつが、からんでくる方が、やりやすいつつーの!!!

「率直に、言いますと。」

「早く言えよ!!!酒が、まずくなる!!!」

「フフ・・・じゃあ、酒の、肴に、聞いてください。」

「マジイ、肴なんて、いらねえよ。」

「スカウトさせてください。」

「ふんつ。なんだあ?モデルの仕事かあ?」

俺は、あどけるように、そいつを、見た。

えっ!!!コイツ・・・。。。

カツコイー!!!

きれいな、ブロンドヘアに、ブルーアイ。

引き込まれるような、顔。

俺は、真っ赤に、赤面して、顔をそむけた。

「残念ながら、うちは、そんなことやってません。」

「じゃ・・・なんだよ!!!」

「銀河警察、第1隊長。と、言う地位ほしくくないですか?」

俺は、びっくりして、そいつを、覗き込んだ。

うん。コイツになあ、ついてっついていい。

「欲しいが、名を、名乗れ。何者だ。」

「M・J・ファントム。とか、言ったら、さすがに、分かってもらえるでしょうか。」

「兄貴の・・・親友か。」

「ええ。まあ。」

「ついてっついて、やろう。お前に。」

「じゃあ。よろしく願いますね。レイウッド隊長。」

名前・・・知ってて、話しかけたのか・・・。
ん？

つてことは、『ゴットアイ』の、弟だと知って・・・。

つーことは、最初っから、男だと、知ってたな!!!
騙された・・・。

俺は、キツと、ファントムを、睨みつけると、

「バカは・・・馬にけられて、死んでしまえ!!!」

どっかできいたセリフを、口にすると、汚い酒場から、出て行った。
行く場所・・・?

そりゃあ。ファントムの、家だ。

隊長の声は、よく響く（後書き）

長くて、すいません！！

え・・・？

『オマケ』がいらないと！？

すいません・・・。

私、オマケが、好きなんです。

準備って言われると、遠足の準備を連想するのは、私だけ？（前書き）

今回ののは、あんまり、中身の無い巻と、なっております。

が、伏線は、ほとんど、ここに貼っているので、読んでください。

今回も長いけど、よろしくお願いしまっすー！！

準備って言われると、遠足の準備を連想するのは、私だけ？

<1>プロローグ

ん・・・レジャーシートわぁ・・・「そそそそそ・・・ないっ
！！」

ええん。レジャーシートって、押入れじゃん・・・。
つぎつぎっ

ええつとお・・・お弁当・・・明日でいいネ。

お菓子・・・いれた？

水筒・・・明日っ。

ぼうし・・・明日持ってけば、いいよねん。

「完ぺきい~~~~~！！」

「おかあさん~~~~~ベラんち行ってくんねえ！！」

「え・・・準備は!？」

「終わったん？」

そして・・・レジャーシートがなくて、友達に借りたことは、言う
までもない。

<2>準備って、何すんの？パート1^{ワッ}

「準備って、何すんの？」

「お前なあ・・・自分で、考えろよ・・・。」

「考えて、分かんないから、聞いてんじやねえかよ!！」

私は、レーザーと、2人で、説明会が、終わってから、帰ってるん
だ。

『準備するよーに』って、レイウッド隊長に、言われたんだけど・・・
準備って何よ？

「あ・・・じゃあ、俺ちで、一緒に、準備すつかあ!！」

「いーの!!--レーザー!!--今日やつさしい」

やった。やった!!--レーザーん家は、豪華なんだよねえ!!!--

さつすが、一流貴族？つて感じ。

<3>準備つて、何すんの？パート2^ッ

「で、準備つて、何すんの？」

「うるせえな。ま、着替えてくるから、ここで、待つとけ。」
着替える・・・て。

どこ行く気だよ・・・。

それにしても、通されたのが、『ジム』つても、気になんなあ。
うーん？

「待たせたな。」

「うん。遅い何してんだよ！！」

ふり向いた、レーサーは・・・鍛えるための、動きやすい服に、着替えてた・・・。

「まさか・・・準備つて・・・。」

「オウ！！体の、準備だぞ！！きつたえるぞあ！！」

「ふっざけんな。」

みんなの、知っているであろう、『ジム』と、この、ジムは、全然違う、なにせ、レーサーは、『体育科』だ・・・。
『体育課』とは、己の体を、魔術を、使って強化し、その、俊敏さや、剛腕を、生かして、敵を倒すという、生粋の、戦闘タイプだ。
ちなみに、私の、『生活科』と、レーサーの、『知識科』は、『陰ながら支えるタイプ』だ。

ベラの、『音楽科』は、生粋の、戦闘タイプだ。

「ま、最初は、ダンベル10回ぐらいで、いいからさつ！！」

『ダンベル』とは、今、みんなが、浮かんだ、イメージと、形は、多分、一緒だ。

けど、この星の、人は、ちよつとでも、時間を、短縮する必要がある。

なんせ、日々、事件に、追われているんだから！！

「お前・・・私が、前も、そういわれて、10回しただけで、帰って行ったら、2日も、起き上がれなかったの、覚えてて、言ってるぞ!!」

「さあ?覚えてないなあ・・・。」

「てめ・・・!!」

「まあ、まあやってみるよ!!」

どう見ても、楽しんでるようにしか、見えない!!

私は、キツと、レーサーを、睨みつけると、レーサーの、家を、出て行っただ。

筋肉痛で、当日、いけなかつたら、いやじゃないか!!

<4>準備って、何すんの?パート3^{スリー}

昨日は、レーサーのせいで、とんだ一日に、なってしまったからな!!

だいたい、準備って、何すんのか、さつぱり、わかんねえや・・・。ベラに、お見舞いも、かねて、聞きに、行こう。

ぴい~~~~~ん、ぼ~~~~~ん!!

ここの、くそ長い、チャイムも・・・相変わらずだなこの家。

「はあ~~~~~い?どなた様あ?」

うわ・・・ベラの、おかあさん、いるのかあ・・・。

「あんら!!エルちゃん!!久しぶりねえ〜。最近、来たんだつてえ?何で、おばさんのいる日に、来てくれないのよあ!!ま、こうして、来てくれたから、いいんだけどネン?あ!!そういうえばあ・・・エルちゃん!!まさか、おばさんに、会いに来たわけじゃないしい・・・私の、イザベラに、会いに来たんでしょあん?」

やっど、しゃべる暇を、くれたか・・・。

「はい・・・ベラに・・・会いに、来ました。」

この、おばさんの、機関銃しゃべり方は、有名だ。

捕まる前に、逃げるのが、普通なんだけど、ベラに会ったためだ。がんばるぞ!!

「やっぱり！だと、思ったわ・・・けど、ごめんね・・・ベラは、誰にも、会いたくないみたいなの・・・。」
おばさんが、こんな風に、落ち込むなんて・・・。
よっぽどなんだ。

おとなしく、身を、引こう。

「そうですか。では、お邪魔しました。」

私は、ハカセの、家に、走って行った、ハカセなら、知ってる・・・すべて・・・ハカセなら。

「ハカセ・・・！！いれて！！私よ！！エルよ！！」

「どーしたの？エルちゃん？」

ニッコニコの、ハカセが、あらわれて、安心した。

「ハカセ・・・教えて・・・ベラって、吸血鬼と、なんかあったの？」

すると、ハカセは、にっこり笑うと、家に、招き入れてくれた。

「ベラのこととは・・・知らないんだ、ごめんね・・・。だけど、吸血鬼なことなら、教えて、あげよう。」

「うん・・・ありがと・・・。」

「じゃあ、知ってることを、話すと、まず、吸血鬼の、持つてる力は、

1、未来を見る

2、噛んだもの（食事したもの）を、吸血鬼に、できる（元、別種族は、できない）

3、肉体を、液化化することで、コウモリを、作り出すことができる。（メタモルホオーゼ）

4、飛ぶ。

5、噛まれたものは、噛んだものの、良き、奴隷になる。

6、唾液には、言うことを、聞かせる毒が、入っている。

ここからは、王族だけが、持つてる力で・・・。

7、地、火、風、水を、操れる。

- 8、『魅了の力』と、言うので、ターゲットを、とりこにさせて、痛みを感じさせなく、させる。
- 9、自らを、吸血コウモリに、変身させることができる。
- ・・・ぐらいかな・・・？ほかに、吸血鬼の、特徴と、言えば・・・。
- 1、長寿
- 2、発達の、スピード（体の発達であって、文明は、進んでいる。）
- 3、目に、光を、とさず、暗くても、暗くなくても、真っ黒な、目。
- 4、頭と、背中に生えた、翼。
- 5、黒い髪。
- 6、鋭・・・
- ・・・え？どうかした？
- 「黒・・・い髪だって!？」
- 「うん。エルちゃんと、一緒だね。」
- つてゆうかあ・・・。
- 多い!!
- さすが、最強!!
- が、さつぱり、分らんぞ!!
- つてか、さつすが、ハカセ!!
- 「悪い・・・続き・・・お願いします。」
- 「うんつ。」
- 6、鋭い、鍵爪。
- 7、タフすぎる体（首を切り離されるか、吸血鬼の鍵爪に重傷を負わされなければ、死なない）
- 8、黒い服
- ・・・終わりだよ。こんな感じかな？もっと、詳しいこと、知りたい?」
- 「イイエ。ケツコウデス。アリガトウゴザイマシタ。」
- 「ん?どーしたの?エルちゃん?」
- どうしたの・・・じゃなあーい!!

長い!!縮めるや!!

ま・・箇条書きにしただけで・・ましか・・。

「次は、地球からの、見方ね。」

「は？」

「夜間死体から生き返り、墓地を出て眠っている人の生き血を吸い、夜明けとともに墓に帰るとされる伝説上の幽霊。この伝説は、アジア、ヨーロッパ各地にみられるが、スラブの伝説を基するらしい。

十字架やニンニクを恐れ、また昼間死体の心臓部にくいを通すと再び現れないと伝わっている。民間伝承中の多くの怪異の中で名高いのは、アイルランドの作家B・ストーカーのゴシック小説『ドラキユラ』（1897）に負うところが多く、映画化もされて広く知られるようになった。・・って感じだけど？分かった？」

「ハイ。ジュウジュウシヨウチイタシマシタ。」

も・・だめ・・私と一緒に、読むのが嫌いな人は、すつとばしていいよ。

あ・・・もう読んじゃった？

ドンマイ。私だって、聞きたくなかったけどネ。

「あ・・・じゃあ・・・吸血鬼は・・もういいから。」

「本当？」

「うん!!それにしても・・レイウッド隊長も、すごい相手にしたネ。」

「うん・・・そーだねえ。ま、第1隊長だしね。」

「ダイイチタイチヨウ?そんなのあるの?」

「うん。」

えつと・・・ダイイチタイチヨウは、分かんないけど、レイウッド隊長の、説明は、できるから。

『僕が、説明しようか?』

え!?!ハカセ!?!

<5>オマケハカセの、説明会

「えつと。まず、レイウツド隊長は、28歳。」
「若い!!」

「15歳にして、第1隊長になったという、超エリート。」
「うっそ!？」

「20歳で結婚。今は双子の、父。」
「あの女顔で、よく結婚できたなあ。」

「ファントム……あ、ベラの、お父さんね。」
「へー。幽鬼ファントムねえ……物騒だな……。」

「に、溺愛され、スカウトから、第1隊長に、一発でのぼり、異量の、解決数を誇る。」

「一発ってことは、入った時から、めっちゃくっちゃ偉いつてことか?つてか、溺愛つて、やっぱり、女顔だからかな?」

「うん。第1隊長つてのは、総合体長の次に偉い立場だからね。溺愛つてのは、もっぱら噂なんだよ。」

「うん?あ、読者の皆さんのために説明しておくけど、きちんと、交互に、しゃべってるから、心配しないでね。」

「何ぶつぶつ言ってるの?エルちゃん?」
「なんもない、なんもない。それより、あの顔のことも、話しておいたら?レーサーとの関係とか。」

「やめなよエルちゃん。本人は、女顔のこときなしてるんだぞ。」

「うん。知ってるけど。あの顔で、今の『富』も、『名声』も、もらってんだろ。」

「あの人の実力だよ。」
「ベラのお父さんも、ベラと同じで、きれいな顔してるもんね。その二人が、愛し合ってるか……怖いな。」

「おばさんたちの、噂には、尾ひれがつきものだしね。」
「それより顔の話っ。」

「瞳は澄んだ緑。髪は、透きとおる様なブロンド。パッチリ二重に、長いまつ毛。整ったお鼻に、艶やかな唇。と、男の人に、ついついナンパされちゃうような、美形。今は、前髪を、オールバックに

「嘘・・・お前の娘、人ずかい荒いなあ・・・。」
プルルルル・・・。

「レイウツドのところは、まだ3歳だから・・・いずれは、同じように、なりますよ・・・。」

プルルルル・・・。

「えー！？お前みたいに、育て方間違えないもーん。」

プルルルル・・・。

「子供みたいなこと言つてと、同じになるでしょう・・・。」
プルルルル・・・。

「ファントムつばくないじゃん。マジで、大変なの？異流民族の、

『ライ』つてのを、ガイドに雇うこと。」

プルルルル・・・。

「レイウツド・・・そんなもんじゃないんだよ・・・。」

プルルルル・・・。

「とりあえず、やってみたらあ・・・やんなきゃわかんねえヨ。」

プルルルル・・・。

「ああ・・・さつきから・・・コールしてますよ・・・。」

プルルルル・・・。

「マジかよ・・・でねえの？」

プルルルル・・・。

「うん・・・全然・・・警戒心強いから・・・異流民族は。」

プルルルル・・・ガチャ・・・『ハイ』・・・『イリュウミン

ゾクマドグチデス・・・』・・・。

「来たぞー！！ファントム！！」

バツ。

「はい・・・こちら銀河警察総合体長、ミュージック・ファントム
です。今回は、ガイドをお一人頼みたくてですね・・・。」

「ファントム・・・スピーカーにしてくれ・・・聞こえねえ・・・

・・・。」

ピッ。

『ふざけないで下さい！！銀河警察が、こちらに電話するわけないじゃないですかー！』

「しかしですね・・・こちらは、銀河警察。ふざけてないですよ。」

「ま、俺だつて、銀河警察の、お偉いさんから電話が、来たなんて、信じねえなあ・・・。」

『切りますよ！？ふざけないでください！！銀河警察なんか！！こつちを、ごみの集まりと、思っているんだから！！！』

「思つてません。とりあえず、ガイドを、お一人・・・だめでしょうか？」

『あなた・・・本当に、総合体長・・・？』

「ええ。やっと、信じてくださいますか？ところで、そこで、一番安い、人つて、誰でしょうか？」

『ライ・・・あ、グランデッセ・ライ・・・です。総合体長さま。』

「その人を、ガイドに。3日お貸しくださいませんか？」

「ビンゴってことか・・・『ライ』ねえ・・・感じて、『雷』かなあ？」

『もも・・・もちろん！！しかしガイドなら・・・ハーン・ピーターなど、どうでしょうか？』

「いいえ。ライを、3日。何滴でしょうか？」

注・滴とは、吸血鬼界の、お金の単位。実際に、血を、与えるわけではない。

『3・・・3日なら、3000滴ですよ・・・後悔しないでくださいね！？あの子は、まだ12歳。赤ちゃんに等しい！！』

「いいんです。では、3月の、第1木曜日と、金、土に。」
ガチャン。

「うわ。ごーいーんだあ？」

「うるさいですよ・・・レイウッド。電話中にも、耳元で、ペッ

チャラクツチャラ……。」

「ごめえん。」

「ほんとにもおう……聞き分けの悪いおばさんで、困りますよ。」

「声は……若いんだがね……20代前半に、聞こえる。」

「ホントは……200歳は、こしてるでしょう。」

「だナ。」

「そんなことより!!12歳って、ほんと、あかんぼぐらいじゃないか!!そんなに、俺たちを、守らすとか言わねーヨナ?」

「言いますよ。がんばってください。」

「マジ……?」

準備って言われると、遠足の準備を連想するのは、私だけ？（後書き）

このくそ長いのに、読んでくださって、ありがとうございます！！
次は・・・問題の、『ライ』えと・・・『グランデッセ・ライ』が、
出てきますよ〜楽しみに、しててくださいー！！

これはもう、ドラキュラ城以外の、何者でもないね。(前書き)

しまった!!

7000文字超えちゃった!!

つ、次こそは……短くします……。

見どころは、かわいい、ベラちゃんと、レイウッド隊長です!!

それに、あの、『機能性に、優れたリボン』の、正体が、わかるぜ
!!

これはもう、ドラキュラ城以外の、何者でもないね。

<1>プロローグ

立ち込める雨雲……。

真っ暗な夜空に、稲光が目立つ……。

どこからか聞こえてくる……あれは……羽音？

壁のひび割れは、無数に広がっている……。

その中にあるのは……立ち並ぶ棺……。

棺が……ゆっくり……開く……。

出てきたのは……人ではなかった……。

「きゃああああ!!あ……ああ……」

消える悲鳴。

貴方は　　ドラキュラ城へ　　それでも行くの……？

<2>私は、帰ったら、3月の第1木曜日が、仏滅かどうか、調べるであろう。

「エーでは、今から、この移動の門を、使つてえ、あの星の、吸血鬼領土入口に、行こうと思ひます。」

レイウツド隊長の、声が、緊迫した、ここで、むなしく響く。

「あのぉ……質問いいですかぁ……?」

みんなが、手を挙げた、15歳ぐらいの、男を、『おお勇者!!』
というような目で見つめる。

「ドゾ、ドゾ。」

「なんで、普通に、宇宙船でいかないんですかぁ?近いから、2時間もしないで着きますよね?」

「けど、これでいっつたら、1秒もしないで着く。」

「だけど……あそこは……移動の門の、開通を、あんまり、喜んでないって……。」

「ア〜?」

「イエ……。」

そうなんだ、私たちが住んでる銀河警察は、同盟を結んでいる星のほとんどの、移動の門を、開通している。

だけど、あの星は、規制されるのを恐れ、なかなか開通させてもらえなかった。

で、出来たのが、去年。

新しくて、向こうも、まだ反発しているから、危険なんだ。

「んじゃ。3時間で、荷作りをして、11時に集合！！じゃー解散！！」

ううそお……で、今、8時。3時間で身作りって……ヒド！！

11時

「エー荷作りで来たあ？」

「はい。」

みんな、いつせいに、答える。

私は、ちよっと、大きめの、バックを持ってる。（手さげバックとかいうのかな？）

その中には、『着替えカプセル』と、お菓子が、入っている。

そして、忘れてはいけないのが、『PO』と書いている、バッチ。

（これがないと、吸血鬼に、襲われるらしい）

レーザーも、同じぐらいの、手さげ。

なんと、おかあさんが、見送りに、来ている！！

うちも、おかあさんが、来てるけどネ……。

レーザーの、おかあさんは、『おばあちゃん』って、感じに、支える感じだ。

きれいな緑色の、目は、レーザーを、思い出させる。

そして、優しい感じの、茶髪だ。

うちのおかあさんは、ふつーの、茶髪に、茶色い目……なんで、私みたいな、赤目黒髪が生まれたかは……『突然変異』だとか。

ベラは、手ぶら。けど、来ている服が、ポケット無から、有りに変わってるから、何かは、持ってきてるんだらう。ベラのところは、2人とも、来ている。

おとうさんは、総合体長だから、当たり前か。総合体長の、ファントムさんは、きれいな、ブロンドが、太陽に、キラキラ輝いている。

首元には、機能性に優れたリボンが・・・！！スカーフみたいに、カツコよくついている。

ベラのおかあさんは、機関銃しゃべりで有名な・・・あの人だ。（覚えてない方は、『準備ついうと・・・（以下略）』を、読んでください。）

ハカセも、手さげだ。

ハカセのところは、誰も来ていない。

誰も。

「エーじゃあ・・・今から、あの星に行くので、家族との別れを、楽しめ。」

楽しむ人なんて、いるのかな？

「エル！！」

「おかあさん・・・行ってきます。」

「行ってつらしゃい。ほんと、エルを、見送る時が来るなんてねえ・・・いやあ・・・写真撮るっ？」

「撮・ら・な・い！！」
もうっ。

撮るわけないじゃん！！

早くに、おかあさんのところを、離れてしまったので、ちょっと、周りを、観察してみよっかな。

ベラのところは、重い雰囲気だ。（そんな、重くなることがあるのだから？）

レイウッド隊長も、加わって、（やっぱり、ファントムの・・・！？）ひそひそ喋っている。

た。

「はっはじめてきたの？エルちゃん。」

「うん。ベラは？」

「私は、5〜6回目。」

みんな、よく来るなあ・・・こんな、怖いところ。けど、若い人が、多いなあ。

あれえ？短髪で、20代以降は、いないや。

長髪と、10代後半、20代前半くらいだ。

「うっそお・・・。え・・・レーザーは！？」

「俺かあ・・・覚えてるだけでも・・・4回かなあ？あ。この星に
なら、さらに、10回だな。」

私は、助けをこう様に、ハカセを見た。

「ごめん。僕も、20回ぐらい、この星に、来てるんだ。あ・・・
ここになら、7回目だけど・・・。」

「そんなに！？」

「ハカセのところは、『学ぶため』って言って、いろんなところを、
飛び回ってるもんなあ。」

レーザーが、しみじみというが、私は、初耳だ。

「しゅ・・・修学旅行、ここだったよね？」

エルが、おずおずといった感じで、聞いてくるが、私は、
で、大学まで、卒業した、ベラたちとは、違うんだから・・・
飛級制度

「は・じ・め・て・な・の・！！」

私が、進もうとしたら、レイウツド隊長に、止められた。

「なんで？隊長？いこーよ？」

「バカ。ガイドさんが、まだ来てねえだろーが。エル。」

「いつけないんだあ。職務中は、あだ名で、読んじゃ、だめなんだ
よあ〜？レイ隊長？」

「ハリー・ポリエステル。帰ったら、殺してやる。」

こわあ！！

つてか、ガイド、遅くねえ？

「あのおく？ガイドの、『ライ』でえす。」

「あ、来たね。じゃ、よろしく。」

え……？

レイウッド隊長の、後ろに、いたら、ガイドが見えない。

レイウッド隊長は、隊長の証である、長いマントを、着てるのだ。

（ちなみに、隊長は、バッチじゃなくて、ペンダントの、『PO』だ。）

ひよこっ。

見たら……1〜2歳ぐらいの、女の子が、『ガイド』って書いてある、黒い旗を、持って、笑ってた。

「子供お！？」

「失礼なっ！！じゃ、あなたは、何歳なのよ！？」

おい、このガイド、喧嘩っ早いな。

「じゅうにさあい！！あなたわあ……いつさあい？」

「ふんっ。バカでしょ。あんた。私は、14歳よ。」

「嘘つくな。この、あかんぼがあ！！！」

すると、布にまかれた手が、私を、レーザーらへんのとこまで、飛ばした……。てか、飛ばされた！？

「オウ、エル。レイ隊長は、怖いぞ。怒ったら、な。」

「レ・サー……レイウッド隊長ってさ、今、魔法使わなかったよね。」

「オウ。こんなことで、使ってたら、隊長じゃ、なかつただろおうなあ。」

「私、ずいぶん重いよ……。それを、片手の、肘から上の部分だけで、飛ばしたんだよ……。すっげえ……。」

「俺にもできる。」

「う……そ……。」

まじかよ……。

ほんと、この国の人は、怖い。

「あ、やっぱ無理、お前、重いもん。」

「んだとお!!」

ほんと、困っちゃう。

『重い』だと？

ふざけんじゃねえ。

「おい。お前ら。よく聞け。この人が、ガイドの、『グランデッセ・ライ』さんだ。」

「え・・・子供・・・!？」

「若っ!! ってか、レイウッド隊長も、何考えてんだ？」

「あんな子供、いてもいなくても、同じじゃねえか。」

ちなみに、ガイドさんつてのは、名前だけで、実際は、血を飲みたがっている、吸血鬼の群れから守る、ボディガード的な人のことを、『ガイド』つていうのが、普通なんだと。(ハカセによると。)

「だーまーれ!! 時間が、もつたないので、進みながら、説明する。」

「エー出発進行!!」

「まず、なぜ14歳の、若者に、ガイドさんを、頼んだか。」

「じゅうよんさい・・・!!」

「わ・・・か・・・すぎだろ!!」

「黙れ。静かに聞きなさい。」

うわ・・・14歳つて、ほんとだったんだ。

そんなことより、なんで、あの小ささで、14歳？病気？てか、なんで、みんな、受け入れているの？

「私たちが、この、王室に行き、王様に、謁見して、3泊したりすることは、もう町人に、知れ渡つてて、襲ったら、死刑つて事になつてるんだ。だから、襲う確率は、10パーセントに近い。」

「けど・・・10パーセントは・・・あるんでしょ？」

誰かが、呟いた。

それもそうだ。

10パーセントのことも、考えなくてはならない。

「だいたい。私たち、『神の家の住人』は、まずいことは、有名だ

(こえなければ、よかった。)

<5>王さんこっええ~~~~~。

「お久しぶりです。ケイト王。」

「久しぶりだね。レイ。」

レイ!?

レイウッド隊長のことを、『レイ』って呼ぶのは、めちゃくちゃ親しい人だけなのに……!!

「何度も言っているでしょう。レイじゃなくて、レイウッドとおよび下さい、と。」

あ……勝手に、言ってたのかよ。

さ、ここで、説明を。

この部屋の、中心に、王さんが、でんと、居すわっている。

王様は、30代前半ぐらいに、見える。

耳に、かかるか、かからないかどうかぐらいの、短い髪に、コウモリを、かたどった、王冠。

おかしい。

なんで、そう思っただ口?

分かんない。

「それより、久しぶり。ベラ。」

「久しぶり……ケツケイト……かつ変わらないわね……。」

「大きくなったね。ベラ。3歳から、頑張ってた……ベラ。」

はい!?

どうゆうこと!?

ベラと、王さんは、お友達!?

「さ、本題に、移ろう。エドワードだろ。」

「はい。ケイト王。エドワード様の事です。」

え、私は、それより……ベラの話の話を続けてほしんだけど……。
「いいよ。捕まえて。ただし、処罰は、1ヶ月だけ。」

「それで充分です。では、質問を。」
質問？

「そのポンプはなんだ!？」
ポンプ……？

私は、デカすぎて見えなかった、それを、見た。
確かに、ポンプだ。

それは、大量の、『血』の入った、ポンプだ。

そして、上の方からは、『ピチャン』と、音を立てて、『血』が、
落ちている。

「フフフ……周りの……ガキどもは、知らなくていいことだ
よ。」

「じゃあ。二人でしゃべろうじゃないか……ケイト。」
「ベラも、おいで。」

そこで、状況の、読めないわたさいたちを、おいて、レイウッド隊
長は、非常に、ライに、耳打ちして、扉を、閉めてしまった。

私たちは、ライの、案内で、また、長い廊下を、渡って、外に出る
はめになった。

王さんこええ……。

<6>血が滴りまつせえ!!

「2人から、4人までの、グループに、わけて、宿屋に、移っても
らいます。」

ライの説明によると、固まっていたら、バンパイアの、格好の、餌食
になるそうだ。

私は、レイウッド隊長、レーザー、ハカセ、ベラの、5人で、『血
滴り旅館』って、ここに、泊まる(名前がやだあ……)

それに、ライも。

レイウッド隊長がいるからだそうだ。

ライ以外は、『家族部屋』に、泊まる……。 (チヨク似てね！！)

ライは、『一人』で、泊まるそうだ。(理由は、『ライ』も、『吸血鬼』だからだ。)

<7>ザ・長寿

うん。

いい感じだ……。

てか、ここは、ほかの種族用らしくて、『普通』だ。(血滴ってねえ！！)

けど、沈黙が、続いている。

ハカセは、あんまり、しゃべる方じゃないし、レーザーは、ベラが、心配なのか、外を、一心に、見つめている。

「あのさあ！！ベラが、吸血鬼にされて、戻ってきたら、どうする？」

私は、つとめて明るく言ったのに……レーザーが、『ギョツ』つて、言いだしそうな、顔で見ってくる。

「ないよ。だって、仲好さそうだったじゃん。それに、あの、ケイト王も、600歳……ぐらいだよ。そんなことしないよ。」

ゆつたりと、ハカセが、言ったけど、私は、後半を、聞いてなかった……！！

「ろ……ろっぴゃくう！？」

「え……言ってなかったっけ？吸血鬼は、長寿だって。」

「聞いた……けど、あれは、30歳前半……ぐらいでしょおう……！！」

私は、ケイト王を、思うかべる……。あれは、600歳に見えないよ！？(600歳なんて、見たことないけど)

「あ……言ってなかった？実際年齢を、1〜150歳までは、10で割ったら、外見年齢になってて、それ以降は、20で割ったら、外見年齢になるんだよ。」

じゃあ・・・600を、20で割ったらあ・・・30・・・そういうことか？

「だから、ライは、14歳なのに、1歳ぐらいに、見えるんだあ・・・。」

「そーだよ。」

私たちの、会話は、そこで終わった。

「ただいまあ・・・おとーさんの、おかえりですよ。」

「た、ただいま。」

レイウツド隊長の、明るいジョークが飛び、その後に、ベラの、細かい声が、きた。

レーザーは、顔を、輝かせた。

ハカセは、『おとーさん』のところで、首を、ひねった。笑いながら。

<8> 忘れたいことって、忘れられないものよねえ。

眠れない。

飛んでごめん。

けど、大したことには、なっていない。レーザーの、ライオン髪が、湿ってペタツと、ストレートになって、笑ったり、レイウツド隊長の髪も、オールバックじゃなくなったから・・・カワイイストレートになっていて、笑ったりは、あったけど、重要なことではない。眠れないことの方が、重要。

今日聞いたことの、興奮が、おさまらないんだよお。

も、いい。

ジュース買って、飲み干したら、寝てやる！！

そっと・・・そっと・・・。

何買おう？眠くなる飲み物なんて、ないよね？

自動販売機の、前についた私は、真剣に、悩む。

自動販売機に、置いてある物は、『A型血液』『B型血液』『AB型血液』『O型血液』など・・・。

飲めるかあ!!

てか、血液型関係あるんだ!?

端っこに、『血を、薄めるのにてきしている、ミネラルウォーター』
つてのがああるなあ・・・コレでいいか。

「ほんとに!?!」

ええ!?!いいと思うけど!?!

あ、私に、言つたんじゃないか・・・。

なんたる、こんな夜更けに?

耳を、澄ましてみよう・・・。

「フフフ。静かに聞きなさいよ。ライ。」

ライ!?!

あの、ガイド!?!

同じ名前なのかな?

この、『フフフ。』って、ベラみたい・・・。(赤の時の)

なわけないか。

けど、もうちょっと、聞いてみよう・・・。

「ありがとうございます!?!イザベラさん!!あ・・・師匠・・・

つて、読んだ方が、いいですかね!?!」

「もちろん・・・フフフ。でも、『サルベールの破』は、また明

後日よ。」

「そんなあ・・・今日もらえないんですかあ・・・。」

「フフフ。まだまだ、面白くなるんだから・・・。焦らないのおう・

・・・。」

えつと・・・ベラじゃん。『イザベラさん』って、呼ばれてんじ
ゃん。

逃げよ・・・そして、忘れたいなあ・・・。

忘れるはずもなく、私は、細かいことを決め、吸血鬼の国から、帰
つても、なお、真剣に、悩んでいたとさ

<9>オマケ（機能性に優れたリボンの説明（ハカセの説明））

「ベラとか、レイウッド隊長が、つけている、機能性に優れたリボンの、名前は、『サルベールの破』って言って、簡単に、説明すると、『サルベールさんが作った、魔力転換権引き寄せ魔術縮小布の破片』の略だけだ。」

「魔力変換権引き寄せ魔術縮小布って、いうのは、魔力を、物体と、返還させて、なおかつ、魔力を使って、物体を、引き寄せることが出来る、魔術を、縮小した布で。」

「すごい魔法なんだけど・・・。」

「サルベールさんは、このリボンを作ってすぐに、家と、ともに、火事で、焼け死んでしまったんだ。」

「残ったのは・・・被災対策をしていた、魔術転換権引き寄せ魔術縮小布と、夫と、子供に先立たれた、妻だけ・・・。」

「そこで、奥さんは、唯一、自分のもとに残った、『布』が、夫を、殺したと、自分に、思い込ませ、かなりデカかった、布を、50本の、リボン状に、切り、そのうち3本を使い、自殺したという・・・。」

「親戚が、『布（もう、リボンになってるけど）』の、対処に困って、高値で売りどばし、世に、広まったものの、作り方までは、伝わらず、今、この世にある、『魔力転換権引き寄せ魔術縮小布』は、50本だけなんだ。」

「そのうち、ファントムが持ってるのは、34本。ベラが、2本。レイウッド隊長も、2本。僕も、つけてないけど、1本持ってるよ。みんな、ファントムに、もらったんだ。」

これからは、『サルベールの破』って、呼ぶからね。

これはもう、ドラキュラ城以外の、何者でもないね。(後書き)

ほんと・・・文字が、多くてごめんなさい・・・。

小分けしたら、いいんだけどねえ・・・。

ハリー・マジックが、終わったたら、考えてみよう!!!

ああ…「じゅうゆうのを、ト田舎っていうんじゃないか。」（前書き）

今回は、かなり長いので、すいません。

けど、『カゲ』ちゃんが、出てきますので…お楽しみに。

ああ……「うゆうのを、ド田舎っていうんじゃないか。」

<1>プロローグ

ウソだろ？

確かに、噂には聞いてた。

けど、本当だったなんて。

なんかの、教科書で、見た気がする、確か、題名は、『60億年前の、神の家』だったかな？

似てる……。

灰色っぽいのが、敷き詰められていて、（後で、八カセに聞いたら、『あすふあると』って、言うんだと。）

へんな、四角い形をしたものが、灰色なものの上を、通ってゆき、

（後で八カセに聞いたたら、『くるま』っていうんだと）その、四角いものの、喧噪で、こだましている。

無駄に高いものが、立ち並び……。 （後で八カセに聞いたたら、『びる』って、言うんだと。）

うるさい……。前に見た、『60億年前の、神の家』と、違うところ……。それは、多いとこだと思う。

生き物が、敷き詰められている。

機会が、敷き詰められている。

そして、汚い。くつきも、『あすふあると』も、『くるま』も、『びる』も。

くすんでる。

私は、そつとつぶやいた。

「こんなところに……。なぜ？」

その呟きは、『くるま』の、騒音でかき消された……。

<2>悩むエルに、凶あり。

オカシイなあ……。

私は、覚えているぞ。

「いつつも優しいベラに、『そのリボンわたしにも、ちょうだあい』
って言った時、

顔色を変えて、『駄目よ!!』って叫んだこと。

私は、びっくりして、泣きだしたんだけど、ベラは、青だったのに、
ドモルことなく、付け加えた事さえも。『まだ、駄目なのよ。二度
と、私たちの前で、そんなことを、口にしないで頂戴。』と、言い
捨て、去って行った事も。

なのに、ライに、『サルベールの破』を、あげると約束するなんて、
おかしい。

それに、幼かった私は、『ベラはいじわるだ』と、思っただけで、
『この言葉、おかしい』なんて、思わなかったけど、おかしい。

まず、『まだ駄目』ってことは、後々は、いいってことだよねえ？
それに、『私たちの前で』って、私とべらは、二人つきりで、イチ
ヨウ並木を、歩いていたのよ？
おかしい。

なんでだろう？

・・・分かんないことは、実際に、聞いてみるが、吉だよね!!
けど、盗み聞きしてたことが、ばれたら、困るしなあ・・・。
ま、遠回しに、聞いて見よん。

「ベラあ~~~~!!」

「あ、エ、エルちゃん」

「お、ひ、さ。」

「う、うん。吸血鬼の国から帰ってから、は、話してないね・・・。
」

「そうだったね!!もう、3週間も前の事なのに、昨日の事みたい
に、思い出せるけどね?」

「ここは、あのイチヨウ並木、ここで、楽器の、練習するのが、ベラ
は、好きなんだ。」

「そ、そうだね。楽しかったね……。地球に、行くことに、な
ったしね……。」

う……。そうなんだ、ケイト王に、問い詰めたところ、地球に、い
るって事が、分かったんだあ。

「うん……。けど、地球は、ひどいところだって、有名だよ？銀河
の中でも、端っこだから、見捨てられてて、発達途上星だってえ。」

「そんなことないと、思うけど……。ま、まあ、狭いって噂よね。」

「うんうん！！それよりさあ。」

そろそろ本題に、行かなきゃあ……。この話が、長くなる！！

「な、何？あ、けど、私、そろそろ……。短めに済む？」

「あ〜うん。済む。済む。あのね、前、私が、『サルベールの破ち
ようだい』って、言ったことが、あるの、覚えてる？」

「え……。あ、うん。そんなこと、あったかな？」

「でね、その時、ベラは、『私たち』って行ったのネ。」

「そうだったかしら。」

やっちまったかな……。ベラの、顔色が、変わった……。

「言ったよ。なんでかなあ？つと、思ってたえ……。聞いたんだけど・

……。」

「ふ、幼いころよ、言い間違いぐらい、あるわ。」

やばい、やばい……！

話し方が、『赤』じみているよあ……。

「そっか、ごめんね。」

「ホントよ。もう、忙しいの。さようなら。」

すた、すた、すた、すた、すた。

ベラ……。あなた……。なにを、隠しているの？

なんで、ベラだけが……。変わってゆくのか？

言葉が、つらつらと、流れて行く……。

「私」

「を」

「うん。それに、今週の、受体は、終わったかどうかが、書かれるんだ。」

「受体って、人を、受け取るの？」

私は、自分で、まとめてみる。

えと・・・規定つてのは、人を、一人貰うつちゆうことが。

で、受け取ったかどうかが、記されている、『吸血鬼パス』があるわけだ。

分かった。分かった。次、どうぞ。

「うん。そして、そのパスに、『受け取ってない』って書いてあったら、（星にもよるけど、）死刑囚を、1体あげるのサ。」

「へえ・・・貰ったら、どうすんの、吸血鬼つて。」

「ん・・・帰るのが、普通だけど、観光してもいいんだよ。『吸血行為』しなければ、ね。」

へえ・・・しか、言いようがない。

なんで、こんなこと知ってんだろう？ハカセは。

「ア、トメテスイマセン。ドウゾ。」

「エル？ま、いいか。で、『規定外の、食飲』つてのは・・・。」

ハカセは、間を、取った。

いつの間にこんな、演出をするように、なったんだろ？謎だ。

「もともと、エドワードの、規定は、1週間に、2体なんだ。」

「なんで？」

「いろいろ。王家には、あるのさ。」

いつの間に、『隠す』ということをし、覚えたのだろう？』さらけ出していた』のに。謎だ。

「だけど、エドワードは、地球で、1週間に、156体と言う、ギネスさながらの、数字を、出したんだよ。」

「ひゃっ・・・ひゃくじゅっ・・・ひゃくじゅっ・・・」

「ひゃくじゅっ・・・」

噛み過ぎの口調から、驚いていることを、さっしていただきたい。

「うん。それを、ほっておく、銀河警察じゃないしね。」

「だ……よね……。」

「しかも、地球は、まだ、出入り禁止区域なんだよね。」

「そーだよねえ!!!」

「だから、『規定外の、奴隷制度』とかも、かねてるんだよ。分かった?」

「あい。アリガトゴザマス。」

「エル?何文字か、足りないよ?」

嗚呼……眠くなったな。

地球に行くのは……6月の第一月曜日……その、ひゃっ、ひゃくごじゅっ、ひゃくごじゅうろっ、ひゃくごじゅ……ああ!
!めんどい!!

だから、いっぱい殺した……(奴隷にしたのかも?)エドワードを、倒すんだ!!

<4>地球って……銀河のド田舎!?

お見送りは、前回みたいには、来なかった。

うちのおかあさんも、『瞬間……空気……コントロール機……せ、せんぷう……機……エアコン……サイクル室内機……室内空気コントロール……だめ!!その部品は……あっち!
!素手で、触らないで!!』って、行く前に、叫んでいたから……来てないと思う。この季節は、夏に向けて、涼しくするための、機械の、買い求めが、殺到するんだ。

ベラの、お父さんも、違う隊が、いつも良くしてくれている、G IEXの故郷つと、言うところから、帰ってくるんだって。だから、欠席。

レーザーのところも……たぶん、欠席。この時期は、忙しそうなもの(なんでだろう?)。

ハカセのとは、もちろん欠席。

で、今は、『タイハイヨウ』って、トコの、いちばん深いところに、いるらしい。

地球は、銀河同盟に、入ってないから。大がかりなところに、『扉を、作るわけには、いけなかったらしい。それに、この、深いところまで、潜れるように、なったら、銀河同盟に、いれてあげてもいいよ、ってことだろう。』

「おい！！エル！！知ってるか、ちきゅには、提灯の付いた、あんこがいるんだぜ。」

「マジで……！！捕まえんぞ！！レーザー！！」

「エル。あんこが、どこにいるのか、知ってるのか？」

「……ハカセ。」

「いや、提灯の付いた、あんこなんて、知らないなあ？」

ハカセが知らないなんて……。

あ、ちなみに、私たちは、薬を、一錠飲んだので、水の中でも、平気だ。

「エ、エルちゃん。レ、レーザー……それは、提灯アンコウじゃない？」

「ん？だから、言ってんじやん。『提灯の付いたあんこ』デシヨ。」

「あ、あの……ア、アンコウであって……あ、あんこじゃ……」

「……」

さあ、レイウッド隊長が、何か、言ってるな。

「ザアー……ハリー・ポリエステルと、私を、いれて、5名で、エドワードが、いると思われる、『ヨーロッパの、イタリアとかね。』

『に、行ってみようと思う。』

は……？

ちなみに、前、ケイト王が、エドワードは、いるとしたら、『ヨーロッパの、イタリアとかね？』って、言ったらしいのだ。

そんなことより、なんで、私が、中心部に、行かなきゃならないのよ。

意味わかんない。やっぱり、レイウッド隊長が、ついてないと、不安とか……？

「エ、エルちゃん。は、早く、ヨ、ヨーロッパの、イタリアとかねに、い、行こうよ。」

「ベラ……よろっぱのいたりあとかねって、国名？」

「さあ……私も、地球には、来た事ないから。」

ふーん。ベラも、来た事ないんだ。どんなところだろう。『出っ歯の板と金』（あれ？『ヨーヨーの中に、金型の板チヨコ』だっけ？）すると、ハカセが、

「汚いって……誰かが、言っただけど、きれいだな。海の中。」
みんなの視線は、さっと、ハカセを見た。

そんな、考え方、してこなかった。

魔力がなく、雑多な、生物。汚いってのは、ホントなのか？
そんなの、知らない。

行ってみなきゃ、分かんない。

「いくぞ〜！おら。」

私たちは、『おら』と、ともに、『出っ歯の板と金』に、ついた。
……んだらう。

私、『出っ歯の板と金』知らないし。

「う……い……や……ちや……。」

私は、『うるさいねえもうやんなっちゃう。』って、言っただけでもりだが、聞こえたかな？

「え、え？な……エ……？」

うん……ベラ、なんて言っただ口？

「レ……は……い……と……！？」

レーザー、なんて、言っただらう？も〜うるさい！！

何この、変な、形をした、箱（？）的なもの。チヨ〜うるさいんだけど。

「行こう！！民宿！！KOTOBUKIに！！」

何故か、レイウッド隊長の、声は、聞き取れた。

すたぁ性力ナ？

さて、そんなことを、思ってる間に、『民宿KOTOBUKI』に、

付いた。

この、オーナーは、もともと、ケイト王の友人の、子供で、この、『出っ歯の板と金』に、来る前に、どこだっけ。『一本』だったかな？に、いたんだって。

だから、『KOTOBUKI』は、『寿』こう書くんだって。いや、だからって言ったも、なんもしらねえけど。

「ここは、静かだな。まだ。」

レイウッド隊長が、呟くように、言った。

確かに、そんな感じだ。『箱』の、騒音が、聞こえない。

「レ、レイウッド隊長・・・チエックインしないで、よかつたんですか？」

ちえっくいん？

なんだ、そりゃあ？

「あ、大丈夫。レーザー・・・いや、レーザーと、ベラで、チエックインしておいて、くれ。あと、ハカセは、残って、俺を、手伝ってくれ。エルは、自由にしとけ。」

ひどー！？

やることないってことだよな。

ふん。ベラと、レーザーのあいだに、入ってやる！！

「#\$%&%\$#\$' &&%\$%#”\$%\$&¥*+%&\$”」
・・・は？

聞き取れませんが。

あ、地球語？なのかな？

すると、ベラが、さっと、メガネを取って、『赤目』になると、私を見て、いつもの感じで、『フフフ』っと、笑うと、レーザーに、「通訳してあげて。かわいそうに、この、言葉、分かんないみたいだから。フフフ。」
と、言った。

レーザーまで、わかんの！？この暗号。

ここからは、レーサーの、通訳。

「勝手に入ってしまったって、すいません。鈴木・ニキータさん。」

「いやいや、いいんだよ。父の、友人の、ケイトさんから、聞いてたからね。」

鈴木に聞いたさん？変な、名前。

「これから、長く、お世話に、なります。ご存知かもしれませんが、私は、ミュージック・イザベラです。こちらは、スポーツ・ウレイザア。こっちは、ハリーポリエステル。この子は、こちら辺の、言葉が、分からないんですが。」

なんだって、そんなことまで言っちゃうんだい？ベラちゃんよお。

「ごめんね、けど、僕は、そっちの言葉、知らないんだよ。ケイトの……え？」

多分、『……え？』は、レーサーの、言葉だろう。

「どーしたのさ。レーサー？」

すると、ベラが、見下すように、『フッフ』と、笑うと、

「\$% ’ \$% & # \$% & % ’ * + ¥ & % ’ ¥ \$% & % * + & ’ & & & ”」

いやだ。

通訳の、レーサーが、喋ってくれないから、分かんないわ。なんて、言っただらー？

「% ’ & % % & \$% % \$ ¥ * + & & ’ % ’ ’ & ’ ’ \$% ”」
わっかんねえよう。

「そ……そうなのか！？ベラ！？」

レーサーは、必死になって、ベラを、見た。

「もちろんよ。レーサー。そんなことないわ。」

あゝあ。

会話の流れに、ついていけない。

だから、レイウッド隊長は、私に、自由にしとけて、言ったのね。確かに。そうした方が、よかったかも。

私は、とぼとぼと、2人（鈴木に聞いたを入れて3人）に、背を向

け、一人さみしく、部屋に、帰った……。あゝあ。

こんな、ド田舎の、言葉なんか、覚えてやるもんか……。ふんっ。
……。くすん。

<5>ちよいと、休憩（人は、それを、オマケと呼ぶ）

「フローラ！！またなの！？」

私の名前は、フローラ。

身長・15センチ 体重・5グラム

で、麗しきイザベラ様の、良きパートナー……。だと、思ってる。

「またなの！！ごめんなさ〜い？大目に見てん。」

肩に、ふんわりとかかっている、栗色の、髪の毛。

くりん。と言いたくなるほどの、パツチリお目め。

あどけなさの、残った顔立ち。

背中から、生えている、虹色の、はね。

私って、チヨ〜かわいい！！

だけど、そんなの、眼中にないんだよね。

だって、綺麗すぎるもの。うちの、イザベラ様。

「もおうつ。そんなんだから、本編に、出れないのよ！？あなたは

！！！」

うるせえっ！！

「行つてきますう。イ・ザ・ベ・ラ・様あ。」

「きー！！憎たらしい！！」

うちの、イザベラ様、今、紫なの。

だから、怖いよん。

ああ。

けど、なんで、出れないんだろう。本編に。なんでだろ？

分かんないよお。

くすん。

皆様、これからも、しばらく出ませんが、私のこと、忘れないでね。

<6>地球語で、『いつつあ・観光』ってのが、ある。(らしい)
レイウツド隊長は、頭いい。
パソコン(地球の)の、やり方を、すぐマスターしてしまった。
ため、私たちは、暇になった。
なんか知らないけど、『インターネット』の、『ちやつと』ってと
この、呟きで、『吸血鬼』の、情報がないか、調べるんだって。
ため、私たちは、『鈴木に聞いた。』の、案内で、観光を、するこ
とにした。

「ここは、日本だよ。」

私は、レイウツド隊長から、自動翻訳機を、もらったため、もう、
地球語だろーが、『いつぽん語』だろーが、分かる！！

「ここが、いつぽんか？」

「バカ。ここは、『いつぽん』じゃなくて、『日本』だ。」
レーサーめえ。

てか、いつぽんじゃ、なかったんだあ。

「あ、あのね、エ、エルちゃん？こ、この国は、金が、いっぱい、
あ、あるから・・・ジパングって、い、言うんだよ。だ、だから、
ジヤパンって、言うんだよ。」

ジヤパン・・・？

黄金の国・・・ジヤパン。

おもしれえ！！

「ほら、聞いてる？エル。」

「何？鈴木に聞いた。聞いてるよ。」

「ここが、大阪城だよ。」

「おさかじょ？」

すると、ハカセが、微笑みながら、教えてくれた。

「大阪にある、お城なんだ。」

そのまんま！？

へ〜面白い!!

イタ〜リア!!面白ねえ!!てか、この、『ぴつつあ』おいしい?

フランス、うける!!すげえ。これが、『ベルサイユ』か。

かんこおく、すごお……。『キムチ』からあいようつ。

ナドナド……。超楽しいっ!!

そう、あのセリフが、聞こえるまで。

「みい〜つけたあ……。」

かつこいい、オールバックから、前髪を、2本たらず、髪型は、跡形もなく……。女の子みたいに、ストレートにしている。

パッチリ目が、細められ、目には、クマがある。

こええ……。

<フ>光無き影よ。

ひた。ひた。

ここは、洞窟の中。

中ってゆーか、入り口?

なんで、そんな所にいるのかと、いうと、40件ぐらい、このあたりで、殺人が、あつたらしい。

変死体で。

それで、ここには、『吸血鬼が出る』という、話が、あるらしい。だから。だって。

「ベラあ〜怖いよお。」

「だ、大丈夫よ。でるのは、きゅ、吸血鬼だけよ……。」「ぎゃ、逆に怖いよ?」

こつーん。かつーん。こつーん……。

「ひゃあー!!」

私は、近くに、いたベラに、抱きついた。

「な、何?この音お・・・。」

すると、ベラの、目が見開かれて。(見開いたって、見えないのにネ。)

眼鏡を、外すと同時に、私を、振り払った。

そして、レイウッド隊長のところに、駆け寄って行った。

あ、ちなみに、今は、40人いるからね。

なんで、ベラは・・・ハカセに、聞いてみよう。

「ハカセ?どうして、ベラは、行っちゃったの?」

ハカセは、ニコツと笑って、唇の前に、人差し指を立てて、『し』と、言ってきた。

ゾクウツ

あ・・・怖い。これを、恐怖っていうんだ。

立ち上る、『気』が、のしかかってくる感じだ。

怖えエ・・・!

ぼんやりと、見えてきた。吸血鬼が。

だけど、エドワードじゃなかった。

女の子だったもの。

5〜6歳ぐらいの、小さな、女の子。

艶やかな黒髪は、ショートカット。

目は、ブラックホールのように、暗い。まるで、光を、引きこんでるようだ。

頭から耳のように生えた羽が、コミカルに動く。

けど、一番目を引きつけるのは、肌。血のかよってない抜けるように、白い肌が、黒づくめの中で、神々しく光っている。

マントが多い吸血鬼には、珍しい卵型の、ワンピースを、つけてい

るところは、まだ、子供って感じた。
美しい……。
オーラが、違う。

負ける。

これじゃあ、勝ち目がない。強い……この子は、強い。
すると、レイウッド隊長が、話しかけた。

「なんで、こんなところに？カゲよ。ここは、立ち入り禁止区域だ
つてことは、分かっているだろウ？」

それに対して、『カゲ』は、ふつと、笑った。

「おにい様は正しいわ。ホントに……頭のいいこと。」
「質問に、答えてくれねエか？カゲ。」

レイウッド隊長は、静かに、語りかけるのに対して、『カゲ』は、
無表情になり、

「カゲ、カゲと、うるさいのウ。エドワードおにい様に、従っただ
けよウ。」

美しすぎる、その『カゲ』は、ゆったりと、右手をあげた……

ああ……「じゅうゆ」のを、下田舎っていうんじゃないか。(後書き)

『地球』の、描写、へたくそで、ごめんなさい。

吸血鬼の友、マリア様よ。(前書き)

今回は、かなり長いです。

レイウッド隊長に、括目せよっ!!

吸血鬼の友、マリア様よ。

<1>プロローグ

マリア様って、知ってる？

キリストを、産んだ人だヨ。

だから、『聖母』とか、呼ばれてるんだよネ。

吸血鬼が、『聖母』ってどーよ。

作者より・意味分かんねエから、いいんだヨ。

<2>カゲ強いネ

手が、どんどん・・・『血』に、なっていく。

その、血はコウモリとして、飛び立っていく。

あれ、これ、襲いかかるんじゃないかなア？

「ただちに、戦闘態勢につけえ！！生活科！！知識化！！バツクえ
まわれエ！！体育科！！音楽科！！スピ強と、吹だ！！！！」

ちなみに、スピ強は、スピード強化のコト。

吹は、吹奏楽器のコト。

音楽科は、弦楽器は、見方に。吹奏楽器は、敵に。打楽器は、1つ
の、人や、物のみに。って、分別されている。

私とハカセは、レーザーの、後ろに回る。(ベラは、いないからね)
レーザーは、指示どーりスピード強化をする。原理は分かんないケ
ド、体が、ほんのり光ってて、カッコイイと思う。

ハカセは、『メガネ』を、装着。

指示を飛ばす。

「エル。武器だ。ヌンチャク系がいい。レーザーただ力でぶつける
攻撃は、あまり効かない。」

ヌンチャク系・・・。

よしきたア！！

手に『魔法エネルギー』を送る。
頭に、又ンチャクを、思い浮かべる。
手に又ンチャクが、出来てくるのが分かる。
生活科は魔法使いでよくある、『無』から、『有』に変換する魔法を扱う。

できた又ンチャクを、素早くレーザーに渡す。この間1秒足らず。
レーザーは、又ンチャクを華麗に扱う……。なんで、使い方知ってるんだろ？

すると、ベラが、帰ってきた。

それにハカセが、素早く反応する。

「ベラ。行進曲。トランペット。」

「フフフ。分かったわ。」

ベラは『サルベールの破』で、トランペットを出す。この人には・
・私はない。

レーザーと、ベラが、次々とコウモリを、消滅させてゆく。

ハカセは、検索中だ。私に指示はない。
くすん。

私は、レイウッド隊長を見る。彼も、『サルベールの破』持ちなので、生活科はいらぬ。ちなみに、知識科よりも正確と言われる判断能力を、持っているので知識科も必要ない。

綺麗に、武器を持って舞っている。彼の攻撃は、踊っているようだ。
「エル！！バリアを張れ！！鉄だ。鉄！！このままじゃ、きりがない。」

「イ、イエッサー。」

鉄のバリアを、慌てて、張る。ちなみにベラとレーザーも、取り入れる。

「うお！？なんだよオ。急に！！」

「フン。さすが妥当な判断だわ……。ハカセ。」

「ハカセ？きりがないって？」

ハカセは、眼鏡を外しながら説明する。

「あのコウモリたちは倒されては、影のもとに戻り、戻ったと思ったら、また帰ってきていた。きりがない。」

そうだったんだ。私がレイウツド隊長に見惚れてた間に、すごい観察力。

「だからって、逃げるコタアねーダロ!？」

「フフフ。逃げてないわ・・・レーサー。眼の前のコウモリを攻撃するより、直接カゲを攻撃した方がいい。その為にはどうしたらイイのか？答えは簡単。カゲが来ればイイのよ。」

あ・・・ヤバい!!

私は、その場から跳ね起きてバリアに触る。

そして隅々までバリアの意識と重なる。

えらい攻撃されてる・・・!!鉄が崩れるほどに。私は、手のためたエネルギーで、鉄を強化する。

「どーしたんだ!?エル?なんか来るのか？」

ほころびを直してる時に話しかけないでほしい。

「違う・・・コウモリだ。」

私は、淡々と答える。んっ。右がやぶられそうだ!!

「フフフ。目立つに最適なのは鉄で囲ってしまうコトよ。光って目立つし、バリアが続けば倒せないしねエ。」

そーだったんだ!!だから鉄だったのね!!うっ!!右を集中的に襲うつもりだなア!!

そして、ハカセの、追加説明が始まる。

「それだけじゃない。カゲの目的は、自滅を誘うことだ。」

自滅・・・!?わ!?急に、左を狙うとは、姑息な・・・。

「だから、弱いコウモリをフワフワ飛ばして、『エネルギー』がなくなるのを待つて、ホントウの、コウモリを放って虐殺するってのが、狙いと見た。」

聞いてられない・・・この力が・・・弱いコウモリだって・・・ぐう・・・重い・・・。

「わざわざ、その攻略の中で踊ることないだろウ!？」

ふ・・・ヤバいかも・・・私の『エネルギー』がつきる・・・
！！右上だあ！！

「だから、攻略にのらない僕らのバリアに、ホントウのコウモリも、弱いコウモリも執着するとするだろお・・・すると、仲間の分が、手薄になる。ね、これで、いいんだけどね。問題なのは・・・エルの魔力なんだ。」

ホント・・・この計画失敗だよ。くそ・・・下からもきやがる・・・
。そこで、ベラとレーザーが、私の変化に気づいた。

ベラは、メガネをかけると、優しい旋律を、奏でてくれた。回復の曲かな？

ハカセは、レーザーに、魔力回復の、ツボを教えているようだ。
・・・はあ。いやされるうゝ。って言ってる場合じゃ無いナ。
かなりの数が、来てる。

くそ、かなりの作戦家だ。カゲ・・・強い！！

<3>オマケく好評につき、も一度フローラく
チャス。

お久し振りっす！！

お忘れですか？フローラです。

『お前って何？』的質問が来たので、答えようと思います。

私は、ミュウジック・イザベラの、パートナーだ。

パートナーとは。

この星の住人には、パートナーが生まれた時から決まっている。

一生会えない人もいるし、会える人もいる。

パートナーがいると、『合体』が、出来る。すると、いつもの倍強くなる。

ちなみに、パートナーと目があつたその瞬間から、『この人がパートナーだ』って分かる。

私もそうだった。

『この子だ。』そう分かった。
一般的には、人のパートナーは、人が多い。
男女だったら、結婚するし、同性だったら、生涯の、大親友だな。
動物・・・ましてや、妖精のパートナーなんて、少ない。
ま、私は、ベラで、良かったんだけど。
ほかの人だつて、パートナーができる可能性がある。
もちろん、極めて少ないんだケド。
友達、ほしいなア。

<4>パートナー、またの名を、生涯の友
そんなこんなで、10分たった時、私は限界に近かった。
ベラの魔力がつきても困るので、曲はやめてもらった。
死んじやいそう。

「エルちゃん!!どいて!!」
後ろから悲鳴に近い声が飛んだと同時に、ベラの華奢な腕が私を、
引きずった・・・なんで?

「来るわよ・・・カゲが。」

パン!!

あーあ。かなり強度あげてなのになア。

「もう・・・手こずらせちゃって。頭の切れがいいのは、ほかにも
3組・・・まずあなたたちから・・・クスツ。」

周りを見渡すと、確かに、ほかにもバリアが3つあった。
レイウッド隊長も、バリアを作ったようだ。

私は、カゲをにらみつけ・・・ようとした。
が、カゲの目が光った気がした・・・から、睨めなかった。
光らないはずの目が・・・光った。

・・・違う。目が光ったんじゃない・・・。
光ったのは・・・カゲが流した・・・涙だった・・・。

「やっと・・・会えた・・・あなたが・・・ハリー・ポリエステル・・・なのね？」
血の気の無い唇から流れる言葉は、私の中で、違う言葉に変換される・・・。

『私が、あなたのパートナーマリアよ。よろしくハリーポリエステル。』

その声は、実際に聞いてる涙声より、はっきりとしたものだった・・・。

「私のパートナー？ベラの、フローラみたいなの・・・？マリア？」
誰の声？

あ、私か・・・意識が当くなる気がする・・・。
まどろむ・・・。何かに包まれているみたい。
頬を、何か生暖かいものが流れる・・・。

「私を泣かした人も初めてだが・・・私の前で、無防備に泣く人を見るのも・・・初めてだ。エル。よろしくな・・・。」
マリアが言った言葉は、私を寝かす、いい子守歌になった。
良く思うと、マリアの声って、気持ちい・・・。

「クスツ。ありがとな。」
鼻で笑う癖直した方がいいわね・・・マリア。

「ふん、癖は・・・なかなか治らないもんなんだよ。エル。」
まどろむ・・・。
眠くなる。

この時、私の頭には、『なんで、思ってることが分かるんだろう？』
という疑問は、消え去っていた。

<5> 詳細説明

「まったく！！そんな理由で、私を呼んだの！？イザベラ!？」
私が、体中光らせて、しかも『コテン』と寝てしまったため、心配してベラが、フローラを呼んでくれたのだ。(ありがとう・・・ベラ!!!)

「そんなのふ・つ・うー！……普通なの！！」
と、まくしたててくる。

けど、ベラは、『私の時は、手が少し光ったぐらいだよ。』と、言
ってたから呼んだんだけどな。

そのことを、話すと、フローラは、余計イライラして叫んだ。

「ベラが普通じゃないの！！普通の子は、体の中で起きる変化に、
耐えきれず、寝ちゃうんだよ！！」

あ、地味に……説明してくれてる。やっぱイイ子だなあ（？）

「ベラは、なぜか体の中の変化に耐え、衝撃を手に送り、自分のも
のに……普通の子は、眠ることで、30パーセントは、逃がして
しまうというのに……自分の物にしてしまったんだよ！！1パー
セントも逃さずに……。」

うん、やっぱり、ちゃんと説明してくれてる。

「あと、エル。あんた、自分の力に驚かないようにね。（見苦しい
から）」

カッコの中を、早口で言うと、フローラは、得意の瞬間指導で消え
てしまった。

あら、ほとんど分かんなかったじゃない！！

<6>呼び出してから、内容がどうであり、心底震えるものだ

私は、あの後本当に眠りこけちゃったみたいで、かなり迷惑をかけ
たようだ。

……だから、『KOTOBUE』に戻った後すぐにレイウッド隊
長様に呼ばれたんだろう。

「あの、すみません……レイウッド隊長。」

「何がだ？エル。」

「いや、あの……迷惑かけたようで……。」

「別に、眠りこけてるお前を運ぶなんて、わけないサ。」

「え？じゃあ、なんで？」

「お前のパートナー、マリアの事なんだがナ。」

レイウッド隊長の、美しい女顔が、私を見つめる。
ドキマギしてしまう……。

「は、はい。」

「力を借りたい。」

力を？レイウッド隊長様が？

『いや……怖い……その人は信用できない!!』

どこからか、声が聞こえた。

マリア？

ついでに感情の波が押し寄せてくる……。

感情は、ビジョンとして頭に現れた。

まず、ケイト王の傍で話し込んでいる、レイウッド隊長。

若い20歳ぐらいの男性と話しているレイウッド隊長。

今回の、美しく舞うレイウッド隊長。

吸血コウモリは、マリアのもとに帰って来れなくなり、もがいている。
レイウッド隊長の、冷たい微笑。

……確かに怖い。

「マリアの、力なんて、かのレイウッド隊長様が、いるの？」

私は、冷え冷えとした感じで聞いた。

「いる。彼女がいれば、エドワードの場所がつかめる。」

『お兄ちゃんをどうするつもり!? 悪魔がつ!!』

かなり、嫌われているな、レイウッド隊長。

すると、マリアが、バサバサと現れた。(コウモリだったんだよ)

「お兄ちゃんを、あなたのもとになんか、渡さない……だいたい

あなたのせいで……お兄ちゃんは……モガア!!」

『モガア!!』の部分で、光より早く動いたレイウッド隊長に、口をふさがれた時の声だ。

「言い過ぎだよ？おちびちゃん？オダマリ。なあんも知らない子が居るんだから。」

イラッ。なにそれ？

って思ったけど、美しすぎるレイウッド隊長が、微笑を浮かべると、超怖え！！

『送ってやる！！受け取れ！！エル。』

声が聞こえた。マリアの声だ。

だが、きれいな声が、それを打ち破った。

『エル。知ってたか？ある装置を使ったら、誰にでも、心に入るぐらい、出来るんだよ。』

マジで！！

うえっ！！二つの感情が、流れ込んでくる・・・酔っ・・・

吸血鬼の友、マリア様よ。(後書き)

私の気に入るキャラ、マリアが出たので。

いじってたら、かなり長くなってしまいました。

けど、まだいじります。

オマケくペラを徹底解剖！〜（前書き）

さてさて、今回は、私の大好きな子。

イザベラちゃんに、スポットを当ててみました。

オマケくベラを徹底解剖！〜

<1>プロローグ

ベラ それは、絶世の美女。

ふんわりとウエーブするブロンド。美白の見本ともいえる、色白。

か弱く光るのは青目^{ブルーアイ}。その青目に、優しくかけられた自己主張に少

ないメガネ。高いお鼻。やや厚めの唇。ほんのりピンクに染まった

美しい頬。なんとという美形！！

それに何よりも、心美人なこと！！

前に出ない控えめな口調に、おどおとしながらも人の世話が見れるしっかり者なところ。

このすべてが、男心をつかんで離さないのですよ！！そして男どもは、平伏しながらこう言う。

「女神・・・イザベラ様よ！！」

そんなイザベラ様を、徹底解剖！！

<2>ミュージック家の過去《前編》

昔々。ミュージック家は、ミラルバという男が仕切っていた。

ミラルバは独身だったので、妻を娶ることにした。その妻が血の結晶の作り主、オリバーだった。

オリバーは村で一番美しく、村で一番魔法が強かった。大人をしのいで！！だからミラルバは、第二貴族であったのにも関わらず、オリバーを妻にした。

オリバーは自分がこんなにも美しいのに、醜いと噂のミラルバと結婚するなんて、耐えられなかった。オリバーは今ままで、私のことを尊敬してくれてた友達が、手のひらを打って返したようにバカにするのが悲しかった。『聞いた？あの、ミラルバと結婚するんです

つて。』という声が、何処からともなく聞こえてきた。悲しかった。

オリバーは・・・美しい人と結婚したかった。そして、『お似合いね。』と言ってほしかった。村中の人に祝福してほしかった。なのに・・・！！醜いミラルバ。意地汚いミラルバ。魔力の弱いミラルバ。

オリバーとお似合いとは思えない！！

オリバーは悩んだ。どうやったら、私は幸せになれる？ああ、ミラルバと結婚しなければ・・・！！

けど第一貴族のミラルバの命令を逆らうなど、死罪に等しい。

オリバーは思いついた。『そうだね。私が変わる必要はないわ。ミラルバを変えればいいんだわ。』そう思いついたオリバーの行動は早かった。国中の美人の血液を集めまわった。（その方法は、今現在不明）その血液を結晶化させ、カプセルに入れた。もしもの時のために、1000粒作っておいた。

いざ、結婚式前日の顔合わせ。

眠りこけてるミラルバにただ1粒。これですべてが変わった。

ミラルバの醜い顔はあつという間に好青年に。

オリバーは思った。

『これで私を笑う者は無くなる・・・。無くなる・・・私の欠点は何も無い・・・。』

さて、結婚式。

醜いという噂なミラルバの顔を見て、誰もがビククリした。だが、一番ビククリしたのはミラルバだった。そのミラルバに、オリバーは、『黙って』と一喝した。

そして、その『血の結晶』に味を占めたオリバーは、子供にも・・・そのまた子供にも飲ませ続けた。

そして死んでもまた続けてほしいという願いを込めて、家訓に『血の結晶』は代々飲み続ける様にと残して、オリバー63歳で死去。

<3>ミュージック家の過去《後編》

時は流れ、オリバーのひ孫のひ孫のひ孫のひ孫の、まだ15歳のルネイがミュージック家を治めていた時。

「陛下!!!ルネイさま!!!こ、こんなものが……。」

「なんだ?見せてみる。」

書かれていた大雑把な内容は、『ミュージック家一流貴族は外出を自粛頂きたく……云々。』というものだった。それを見たルネイは、がっくりと肩を落とした。

「とうとうきたか……まあ、しょうがないといえましょうがないか。隠花^{インカ}。皆を呼んでくれ……。」

「は。ルネイ様。」

姿をあっという間に消す隠花(俗に言う忍者)をルネイは悲しそうな顔で見送った。

「あの土下座に困ってたのはこつちもだよ……。」

ルネイはまた手紙を見た。『自粛』と書いてある。辞めるというわけでは無い様だ。

「おにい様!!!外出自粛だつて!?!ふざけてるの!?!」

いきなり怒鳴り出てきたのは、妹のカリバーである。

(こんな面倒くさいのから呼ばなくてもいいのに、隠花めあいつは面倒なものから先に、派か。)等と思いつながら、ルネイは説明した。

「私達の美しさに、土下座や心頭したりする症状が出るから、ミュージック家の一流貴族は外出自粛になったんだよ。」

「知らないわよ!!!そんなもん!!!私達なんて、学校から授業にならないから来るなど言われているから、シヨツピングが生きがいのよオ!!!」

ルネイはカリバーがすぐヒステリックになるので困った。

「まあまあ、自粛だし……出てもいいんだけどね。」

「んなこと分かってるわよーッ！！バーカ！！」
と言って走り去っていった。よもや、この自粛制限が、一人の死に
関わるとは知らずに。

時は流れ、ルネイは28歳の青年とかしていた。子供を持ち、妻を
もち・・・立派な主になっていた。

「ホント？！おねエちゃん！！さすが自粛制限をもともしない女
！！」

「一言多いわ。そう、ほんとヨ。この職人の所に行けば・・・私た
ちの美しさは封印され、普通に暮らせるのよ！！」

生まれた時から、みんなと一緒にというのを経験できなかった、2人
にとつて、これは大きな進展だった。

「ただしこの職人は・・・イエ、行ってみるとわかるわよ。ルネイ。
」

ルネイは、職人のもとへいった。

「お前がルネイ？美しや、美しや、その変装のおかげで真正面から
拝めるのオ！！キャハハハハハ！！」

「あの、あなたが私たちの美しさを封印できるという、職人ですか
？」

髪を黒に染め、帽子を深くかぶったルネイは、信じられないといっ
た目でその職人を見た。その職人は、少女だった。15、16歳ぐ
らいの。

ルネイは、頭の中でおかしいと思いつつも、事情を説明した。そ
して子孫まで続くほど封印してほしいと頼んだ。

「ほう。血の結晶ねエ。そのおりばとやら・・・やるの。」

「オリバーです。」

「だが、強すぎるのお・・・この美しさ・・・妖艶と言った方が
いいかの。私の強さじゃア、打ち勝てねえの。」

「そんな！！嘘だろ！！！！」

ルネイは、顔を真っ赤にして怒った。だが職人は変わらずふざけた様な顔をして、あつけらかんと言った。

「ま、オメエらの誰かが死んだら、ええんだがのウ。そんな簡単に、死ねとは言えんしの。ムリムリ。」

「どうして死ねばいいんですか？」

「いやあ、死んだら焼くの。そしたら灰になるけんの。そしたら、血の結晶の力のこもった遺灰ができるから・・・ま、それを使って、封印する杖・・・とかが作れるの。」

ルネイは、その時心に決めたのかもしれない。

死ぬなら僕だ、と。

職人はくすくすと笑うと、少しすまなそうな顔をして

「なアに、深く悩むことないの。諦めればええの。」

そして考え込んだような顔をして、ルネイを見つめて言った。

「別に、お前が死ななくてもいいの。」

ルネイは、静かに首を振って出て行った。

残された職人は、悲しそうな顔をしてつぶやいた。

「死なんでもいいつちゅうのに」

さて、ルネイが職人のところを訪れた一週間後に、スポオーツ家の党首グラスにおかしな手紙が届いた。

『親愛なるグラス様へ、

(前略)

今回はミュージック家で起きている不正に対して、ご報告したいのであります。

ワタシら平民は、ずっとずっと我慢しておりました。

知っておきながら黙るのは心苦しいこと。故に、この機に常時ですべて吐き出させてもらおうとします。

ミュージック家は禁忌である、『血の結晶』を使っております！！

これは罰されるべきこと。第一貴族だからって禁忌を犯していいなんて話あるでしょうか？罰するべきです。グラス様。

これは平民一同の願いであります。』

グラスは、首をひねり一言。

「まア、ヤツは昔から抜けていたが。ここまでバカとはなあ。ルネイ。そんなに死にたいなら直接言いに来たらいいのに。筆跡鑑定を知らないのかな？ルネイは。」

数か月後ミュージック家の主は、死刑と決定。家族は、3年以内に無害になるという約束で無罪放免。

ルネイは、この結果を職人に伝えた。牢の中から。

「ルネイです。私が死ぬことが決定しました。遺灰を取りに来てください。2日後です。」

「お前が死ななくてもええちゅうただろーがのオ！！ホンマに、死ぬつもりなの？」

「ええ。ゼリ又に、遺灰を渡しておきます。いつでもいいので取りに来てください。」

ガチャン

職人は、がっくりと肩を落として、作る準備を始めた。

「わしが・・・一人の死を招いてしまったの・・・。」

一週間後。職人は遺灰を取りに行った。ゼリ又はおとなしく遺灰を渡して、一言。『これにルネイ、私、その他大勢のミュージック家の者が望みをかけてるんです。』それに対して職人は、深く、深くうなずいた。

一か月後。杖は完成した。職人は疲れ果てていた。なにせ、一年はかかるかとゼリ又に言ったら。『は？言わなかったけ？2か月以内に手を打たなかつたら皆殺しだつて言われてんのよ。』と一睨みされてしまったのだから。職人は杖を見つめた。何か足りない気がする。この杖は、首に向けて『禁』と唱えれば、赤で書かれた魔術語が飛び出し、美を禁ずるといふものである。

「あ、そうの。魔術語を書くスペースに、30文字の余りがあるの。」
職人は考えた。そして、ある魔法をかけた。

「ア、ラーモストラスチオングスボラツシャライデー！オリバー（アイグウィツシュ）ルネイ（ザリランガルボ）シホ（サーシャ）！！」

意味はこう。『ちょっと加えさしてもらおう。オリバー（作った人）ルネイ（杖の材料）シホ（職人）』
うむ・・・わしの名前まで入れてもうたの。と職人は思ったが、ゼリ又に渡しに行った。

時は流れ。流れまくって。ファントムが納めてました。ある日、ファントムの娘、イザベラは、鏡に向かって言いました。

「オ・・・リバー？（ツクツ・・・タヒト？）ル・・・ナ・・・あ、違う。ルネイ（ツエ・・・ノ・・・ザイリヨウ？）シ・・・ホ・・・（シヨクニン・・・？）」

イザベラは、この何の関係のない文字を見ながら、首をなでました。「私・・・もここに乘れるほどの偉人になりたいわ。」

こうして、オリバーから・・・ルネイへ・・・そしてイザベラへと・・・時は流れてゆくのであった。

<4>ベラの日常

注・これは、吸血鬼の討伐に行く前、エルが警察に入る前の話です。たったった。足取りは軽い。今日は、レイの特別授業だもの。私は、レイウッド隊長のことをひそかにレイと呼んでいる。

レイの授業は、結果見せで有名だ。つまらないことをただただ喋るんじゃない、実践だけで見るといって、レイらしい授業だ。もちろんレイは先生じゃない。第一隊長として、一ヶ月に一回の授業があるわけだ。（ご愁傷様。）

そういえば、前。エルちゃんが、『なんで魔法使いのくせに歩くの

「?って読者から聞かれたよーっけど、私もなんでか知らないよーっ
って言ってたな。なぜかっていうと。地球でも、道路では乗り回す
車を、家の中でも乗り回したりしないでしょ?それと一緒に。」

魔法使い〓箒に乗ってるなんて・・・死ぬ。私たちが普段使ってる
魔法は、生命エネルギー。地球人だつて、秒速10キロ状態で、学
校行けつて言われても。ムリでしょ?それと一緒に。くそ疲れるんだ
から。

ちなみに。私が通ってるのは中学校。ホントは大学卒業したんだけ
ど・・・エルちゃんと遊びたいし。することないし。レーサーも。
ハカセも。エルちゃんに付き合ってるんだ。あ、着いた。

「ベラあ~~~~!!聞いて、聞いて。今日ね。朝さ、7時に起きよ
うと思つてたのにね。起きてみたら8時だったのお〜。だからさあ。
私今日髪ごわごわなんだよねエ。」

何処にいたんだ?エル。ていうか、寝坊したのに私より早く来てる
つてどういうこと?そして、艶やかな黒髪をなでるのやめれ。私は、
朝6時に起きてセツティングしても跳ねまくりだよ。なんて、言え
るわけなく。

「な、何言ってるの・・・。エ、エル。髪の毛・・・綺麗だよ・・・」

「え・・・?・・・チヨ、胸キュンしちゃったじゃん?!!そう
ゆーのその美形で言われたらあ、倒れる!!絶対倒れる!!同性で
もときめかせるその美しさ。羨ましい!!」

もう。朝からテンション高いナ。その声聞いて振り返った人何人い
ると思つてんの?あ、その中にレーサーもいる。恥ずかしいナー。
・・・レイいないかな?いないよね、今日は、教師としてきてるもん
ね。

教室に入ると、もうレイは来ていた。周りを見渡すと。かなりの子
がレイに見とれてる。レイにとつて私は大勢の中の一人なのか?あ
あ、レーサーとエルの喧嘩の音が鬱陶しい。

「オメエの声。メツチャうるさかったぞ。そんな朝っぱらから叫ぶ

バカがほかにいるか？バーク。」

「バカバカ言わないでよ。そっちこそ。ベラに見とれてたんでしょ？私の髪がほめられたの羨ましがってたでしょ？」

低レベルの争いだ。なのにレーザーは真っ赤になってる。だから。だから私を振り向かせられないのよ。

「おい。すわれ。始まんぞ。」

赤くなつていくのが分かる。頬が熱い。レイの声。低く。静かに諭すような……。綺麗だ。まとわりつか感じじゃなくて。さっぱりしてる。ああ。綺麗だ。美しい。好きだ。すごく。すごく。

キーンコーンカーンコン！！チャイムの音で、バタバタバタとみんなが座る。レイは、みんなを見て。一言。

「じゃ。やるぞ。楽しめよ。」

レイはいつも楽しめという。そこも好きだ。もちろんその女顔も好きだけだ。

「んじゃ、イザベラ。ウレイザー。スタディー。来い。」

呼ばれた……。！！レイに……。って。私たちは、よく手伝いさせられるんだ。ホントは強いから。

「今回は。この人形を使うぞ。」

取り出したのは、女の子の家には必ずありそうな着せ替え人形の、等身大サイズ。（怖い……）

「4人グループをつくって。一人が人形役。あとは倒す役につけ。」

そこで、レイは物体を操れる笛を持ち出した。そして吹き始める。こつちを見て一言。（弾きながら声を出すって、どうしてるんだろ。う……。）

「来い！！イザベラ！！」

妥当な判断つてのは、分かってる。（ハカセは攻撃できないし。レーザーに、凹にされても困る。）けど私が呼ばれたことがうれしかった。打楽器を取り出して、分解のメロディを奏でる……。途端に人形は、バラバラになった。この程度でいいだろう。

「よし。こんな感じに、使えなくなったら負け。がんばれ。勝った

方に、1000Pをやるう！！倒す役は山分けな。」

うまい。じょうずだ。なりたくないであろう人形役は、一気に1000P。勝ちやすい倒す役は、約300Pとは。フフ。そんな頭のいいところも好きだよ。レイ。私の視線に気付いたのか、レイがふり向いた。赤くなる気がする……。そんなに見つめてた？ふいつと視線を外す。

「俺たちは、このまま組むか？いいか？レーザー、ハカセ、イザベラ？」

……。レイは、私だけイザベラと呼ぶ。好きだ。私が理由を聞いたら、『俺だけ特別って感じるだろおう？』と、微笑んだからだ。ホントに好きだ。そんな所も。私は静かに頷いた。

「行くよ？ベラ……。右斜め上。衝撃波。」

余計なことは考えない。ハカセが右斜め上と言えば右斜め上なのだ。ずっと持ってたカスタネットで、衝撃波を出すメロディを奏でる。

確かに上手いこと人形は滑り込んできたが、ここは、レイ。サツと避けた。

「次。レイウッドを狙え。」

「え……。？あ、アリの……。？」

「早く。」

余計なことは考えないようにしなきゃ……。ごめんレイ！！衝撃波が飛ぶレイはビックリするような顔をしたけど、拳を突き出した。駄目よ！！いくら例でも私の衝撃波を素手で……。避けた……。私の衝撃波が。そんな。ハカセを見る。ハカセはいらいらした口調で呟いた。

「避け玉を持つてるなんて。とことん頭の切れる奴……。」

ああ。避け玉か。すべてから避けられる玉だ。だから私の衝撃波からも避けられたのだ。頭いいナ。そんな所も……。好きだよ。レイ。そんなこと考えていたら、ハカセの指令が飛んだ。

「人形にスローモーション当てて。なるべくかするように。」

びゅんっ！！空を切って私の魔法が飛ぶ。人形は、サツとよけて掠

りもしなかった。

そこにレーサーの拳が飛ぶ。不意を打たれたかのように、人形は、右腕を落とされた。なるほど。二段落ちってわけか。私の魔法はフイクってことか……。かすらなくてよかったじゃない。

レイは、サツと人形操りの笛を捨てると、ホイッスルを吹いた。試合終了の合図か。周りを見るとほとんどの人形がボロボロになっていた。残ってるのは12体中5体ぐらいか。

「よし。勝った者は、Pをやろう。来い。」

あゝあ。行きたかったな。右腕外せられたのに。ちよつと手抜いてくれればいいのに。まあ。そんな所も好きだけど。

「イザベラ。この後校長室に来いよ。」

いっつもだ。レイの特別授業の後は、校長室に呼ばれる。私だけじゃないくて、みんな慣れてるから何も言ってこない。それはそれで悲しいものだ。ハカセは、悔しそうにしてるし、レーサーは右腕をとれたことを自慢している。エルちゃんは、負けたようだ。ケンカしている。8歳の坊や相手に。

キーンコーンカーンコーン。終わってしまった。とうとう。けど、まあ、まだ会える。レイには。

「失礼します。何ですか？イブサ校長。レイウッド隊長。」

何の用かは知ってるのだが、口調だけきちんとしておく。レイの視線が突き刺さるようだ。ちなみに。私は今赤だ。いつもここに来るときは、メガネをはずしている。そんな私を見て、レイはため息をついた。

「いっつもそんなにしゃっきりして、真面目にしてくれたらいいのにな。イザベラ。」

「フフフ。ムリよ。そんなの……。クスッ。で？何で今日は校長室なわけ？」

いっつもは、職員室の横にある、生徒指導室。けど何故か今回は、校長室だったわけだ。そして校長イブサ……。イブニング校長は、レ

イウツドの幼馴染。だから、ちょっとは関係あるんだろう。

「まあ、まずはいつもどおり聞いておこう。犬の調子はどうだ？」

「ん……。順調よ。さして変わんないわ。ちょっと馴れたかも。」

二人は、どうでもいいという感じな聞き方だ。本題はなんだろう？

「実は、今度吸血鬼を討伐することになった。」

え？吸血鬼？大っ嫌い。ケイト以外は。苦手なんだよね。あの暗い目。露骨に顔に出たのだろうか、レイウツドは、なぜか申し訳ないような顔をして、私に言った。

「そこで、俺の隊長補佐をしてほしいんだ。」

「私が？ふふんっ笑える。冗談でしょ？たまには笑えること言うじゃない？」

「冗談じゃないんだ。しかも、ケイトの息子を討伐する。」

「は……。！！エドワードのこと？彼は、貴方の友達じゃない！！わ、笑えないわ。そんなの。」

やだよ。私。そんな。こわいよ。そんなことできるわけがない。私はまだ、現場に出たこともないのよ？

「落ち着け。イザベラ。表だては、イブサが補佐役をやる。だけど本当は、お前がやるという、筋書きだ。」

「そんなの……。いや、もうジタバタしないわ。そんなの面白くないもんね。」

レイは、嬉しそうにうなずいた。イブサ校長は、なぜかニコニコしている。

「ベラさん。なんで君は、レイチエルのことを、レイウツドって呼ぶんだい？君は、すごく仲いいんだろ？」

私は、出掛けに言った。

「特別な感じするでしょ？」

レイの顔は、可愛かった。校長の顔？みてないよ。そんなもん。

私は、学校を出てメガネをかけた。いろいろはつきり見える。

空は青かった。私の目も青かった。そう。レイは私の顔を見て行ったのだ。『ベラちゃんの目は、空みたいにきれいだね。』私は覚え

てなかったが、お父さんから聞いたことがある。私はまだ1歳だった。けどこの話には続きがある。『おそらア？ナアニ？それ？おもしろいイ？』その時は赤、青関係なく自由に喋っていた。『うん・・・綺麗だよ。ほら、上にある青いあれが空だよ。』『わあっ！きれいだね。おもしろい。』『ベラちゃんの目も綺麗だよ。』『ほしい！！れーにいちやんとつてえ？』『駄目だよ。届かないんだ。』お父さんから聞いたことによると、それで私は泣きじゃくったという。慌てたレイは、なだめようとして理由を聞いた。『どうして泣くの？ベラちゃん。』『わだちのめえがどどがないところにいぢやっただあ！！』それを聞いて、びっくりしたという。目が空になったと考えていたのだ。私は。
空は青かった。私の目も青かった。

「ベラあゝ！！まってよ！！一緒かえろ。」
後ろから騒々しい声が聞こえてきた。エルだ。私は振り返って微笑んだ。

「ごめん。エ、エルちゃん。い、一緒かえろっか？」
見ると、ハカセもレーサーもいた。

4人で帰った。足取りは軽い。だって、みんなが大好きなんだもん。1の太陽が（銀河警察の太陽は、2つある。）沈みかけたころ。空はほんのり赤かった。

これが私の日常。これが私の大好きな日々。このまま続けば・・・
いいのに。

オマケくべらを徹底解剖！〜（後書き）

書いてて楽しかったな。今回は。なんか本編は、重いので。ま、読んで楽しいのかどうかは、分かりかねますが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9794r/>

ハリー・マジック 1 ~ 吸血鬼の友 ~

2011年11月16日11時48分発行